

〈論文〉

1. ドゥルーズ＝ガタリ資本主義論の再検討

原 一樹

2. 青年層における運動負荷時の生理学的変化— 運動量変化に伴う血圧および心拍数の変動について —

櫻井 一成 西村 典芳

3. 漢字をどう取り扱うか——固有名詞の中国語翻訳をきっかけに

劉争

4. La relation entre la « force majeure » et l'« équilibre des forces » chez Proudhon.

Munechika ITABA

ドゥルーズ＝ガタリ資本主義論の再検討

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

【目次】

1. はじめに
2. D&G による資本主義批判の特徴
3. D&G による資本主義理解の位置付け
4. D&G による資本主義批判の意義と課題
4. 1 D&G 哲学以外の資本主義批判理論との関係
4. 2 「資本主義への抵抗」の存在論的基礎付け
4. 3 「多様体の存在論的優位性」と「生成変化」に関する議論状況と課題
5. 終わりに

1. はじめに

『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』¹から数十年、資本主義社会や国際情勢全般は大きく変貌した。ドゥルーズ＝ガタリ（以下 D&G）に影響を受けた理論も多岐に亘り、彼らの資本主義理解と批判の孕む可能性を見定め批判的に継承・発展させる為には、聊かの労力が必要である。そこで本稿では、（特に英語圏での）D&G 解釈者や先行理論家の議論を広く参照しつつ、改めて D&G の資本主義論から継承すべき課題を抽出する作業を行う。D&G の議論の概略をまずは振り返ろう。

『アンチ・オイディプス』において資本主義は、それ以前の社会が持つ欲望・信念・行動に関する諸コードを「脱コード化・脱領土化」し、一般的等価物たる貨幣を基礎とする内在的公理系を打ち立てるもので、常にその運動を再開し続けるとされる。資本主義は「脱コード化・脱領土化」により人間を他人への個人的従属や様々な社会的拘束から解放するが、「脱コード化・脱領土化」した「流れ」（欲望や貨幣の流れ）を公理系へと回収するという限界を持つ。資本主義を超克するには「脱コ

ード化・脱領土化」の運動を更に「遠くに進む」ことが必要で、この振る舞いが革命的だとされる。

「いかなる革命の道があると言うのか。・・・世界的市場から撤退することか・・・それとも逆方向に進むことか。即ち、市場・脱コード化・脱領土化の運動の方向に更に遠くまで進むことか。・・・諸々の流れはまだ十分に脱領土化しておらず、脱コード化もしていない・・・ニーチェが言ったように・・・更に遠くまで進むこと、＜過程を加速する＞ことだ。」（『L'anti-Œdipe』以下【ACE】p. 285）

『千のプラトー』では、D&G が先進的に看取していた「国際化された資本主義」の現状分析や、資本主義と国家との関係に関する議論が充実している。『千のプラトー』は D&G の包括的な哲学を展開する著作なので、資本主義への抵抗戦略として提出される着想もより多彩な文脈で利用可能な抽象度の高い概念として提出される。本稿では各概念の内実には立ち入れないが、「生成変化」・「戦争機械」・「逃走線」等の一連の諸概念がこれに当たる。

銘記すべきは、D&G が『千のプラトー』においても資本主義の只中に可能性を見出す点である。

「資本主義は・・・その公理系を逃れる流れを全方向に発生させずにはいない」とする D&G は、「決定不可能な命題」という論点を提出し、こう言う。

「我々が＜決定不可能な命題＞と呼ぶものは・・・システムが接合するものと、それ自体連結可能な様々な逃走線に沿ってシステムから逃れ続けるものとの共存であり、分離不可能性である。決定不可能なものは優れて革命的決定の萌芽であり、場である。」或いは、「資本主義が脱コード化され脱領土化された流れを＜接合＞する時には必ず、流れは更に遠くへ行き・・・新たな大地を描き戦争機械を構成する＜連結＞へと入ろうとする。こ

の戦争機械の目的は・・革命的運動（流れの連結・数えられない集合の構成・全ての者のマイナー生成）である」と言われる。（“Mille Plateaux” 以下【MP】 p. 590）

この引用部は「戦争機械」・「マイナー生成」・「大地」等の D&G 独自の新奇な概念を含み容易に理解を許すものではないが、本稿の論脈では差し当たり、資本主義がいかに「接合」や「公理系への回収」の運動を行うとしても、まさにその運動の中に「更に遠くへ行く流れ」や「システムから逃れ続けるもの」が不可分の生じると D&G が考えていた点のみを押さえておけば良いだろう。

以上、D&G の資本主義論の概略を踏まえた上で、以下では、1) D&G による資本主義批判の特徴、2) D&G による資本主義理解の位置付け、3) D&G による資本主義批判の意義と課題、について順に検討を加えていくこととしよう。

2. D&G による資本主義批判の特徴

D&G による資本主義への批判的スタンスは一見明らかだが、【Patton2012】が整理するように、D&G の政治性は様々な解釈を喚起している。ⁱⁱ彼らの政治性をどう評価し、その資本主義批判の特徴をどう見積もるべきだろうか。

政治性の評価について特に問題とされがちなのは「脱領土化の更なる進展」の含意についてだが、興味深い解釈は【Garro2008】ⁱⁱⁱのもので、「他の生産様式が遠望されねば論理的には可能性として現行システムの果てまで進む必要がある。そこから商業的流れの脱領土化への弁明が生じる。この過程は現代世界の経済・金融規制緩和の流れに明瞭な表現を見出す」とする。他方【Choat2009】^{iv}は「ドゥルーズをハイエクら新自由主義と繋げる者もいるが、誤り」だと対立的解釈を提出している。本稿としては、D&G の著作全体の調子や政治的発言を見る限り、彼らが（特に 70 年代半ば以降の）ネオリベラリズムの支持者だとは判断できないにせよ、(D&G 概念全般に言えるが)「脱領土化」概

念が多様な文脈に適用され一義的理解を許さない点にも解釈上の問題が生じる一因があると指摘しておきたい。その上で、D&G が「金融資本の流れ」を肯定的に捉えるように読める箇所がある点^v、金融資本への理論的注目が高まる中、D&G の議論の妥当性を再検討する必要がある点も、合わせて指摘しておこう。

本稿の論脈では D&G の政治的立場全般よりも寧ろ、彼らの資本主義批判の特徴を把握する必要があるが、ここで D&G の資本主義批判の在り方の理解に際し有益なものとして【Lenco2011】の解釈に注目したい。【Lenco2011】^{vi}は、「個人的意見を表現するドゥルーズとドゥルーズ哲学とを区別する」ことで、一貫性を欠くように見える「二人のドゥルーズ」、即ち、「世界人口の四分の三を極端な貧困に放置する資本主義に懸念を表明し、哲学は人間たることの恥辱の探究だとするドゥルーズ」と、「己に生じることに相応しい者たれと言うドゥルーズ」との一貫性が保持できると言う。これを我々なりに咀嚼し、資本主義を批判する視点の取り方として、「結果からの批判」と「内部からの批判」とを区別してみたい。「結果からの批判」とは即ち、資本主義の齎す悪しき結果（貧困・環境破壊など）に根拠を置く批判であり、理解し易い。D&G もこの視点からの批判を行うが、それに加え「内部からの批判」を提案しようとしており、彼らの資本主義批判の本領は後者にあると言える。それはどのようなものか。

「内部からの批判」を伝統的なマルクス主義的着想で考えてみれば、賃金労働者は、いかに豊かになれども「剰余価値」を資本家に搾取される無力な存在であり、それ故に「不正な体制」としての資本主義が批判される、ということとなろう。然るに、D&G のマルクス及びマルクス主義諸理論に対する立場は様々な解釈の並立を許すほど錯綜しており、例えば「剰余価値」・「搾取」・「階級」等の概念について彼らが施した更新作業等を、伝統的マルクス主義との距離を見積もりつつ再検討

する必要がある。但しここでは結論的に、D&G による「内部からの批判」は、マルクス主義的批判のように正義や不正義という概念に依拠する議論ではない点を指摘するに留め、先に進もう。

筆者なりに表現すれば、D&G による「内部からの批判」は、「資本主義による解放の不十分さ」の認識の下、「人間の更なる解放や別の存在の仕方の可能性」を示すことで資本主義を批判するものである。D&G はこの批判を概念創造という形で展開する。

具体的にこれが意味するのは、『アンチ・オイディプス』での「脱領土化の更なる進展」という聊か曖昧な主張が、『千のプラトー』では「資本主義の公理系を逃れる流れ」や「革命的運動」としての「流れの連結・数えられない集合の構成・全ての者のマイナー生成」等の表現へと継承されつつ、様々に新奇な諸概念（「生成変化」・「戦争機械」・「逃走線」等）が創造されることで発展を遂げたということである。標語的に纏めれば、D&G による「内部からの資本主義批判」は、諸概念を創造する政治的存在論の展開によって果たされる、と言える。この資本主義批判の持つ意義と課題を検討する前に、次節では D&G の資本主義理解の現時点からの位置づけを行おう。

3. D&G による資本主義理解の位置付け

現代の資本主義は、マルクスが示唆した「資本の下への社会全体の実質的包摂」が到来した時代だとの認識を持つ論者は多い。筆者が見るところ、D&G は「実質的包摂」なる表現は用いないが、この状況を既に 1970 年～80 年の時点で理解していた。「実質的包摂」に関しては「労働の在り方」・「賃金労働者の包摂のされ方」・「主観性の生産の生産力化」の三点の状況理解が重要である。

一つ目の「労働の在り方」について【Thoburn2003】^{vii}は、「実質的包摂」状態では「労働と社会生活が大規模産業の複雑な機械的過程に包摂され変形され」、「支配的力や統一性は労働の

リズムではなく資本自体のリズムとなる」と言う。この点について D&G は既に『アンチ・オイディプス』で、人間が（日常的意味での）「機械」と一体化し（D&G が独自に定義する）「機械」の付属物となり、資本のリズムに従い生産するという認識を示していた。^{viii}また、『千のプラトー』で描写される「機械的隷従」状態では、「人間自らが・・人間同士で、或いは他のものと共に構成する機械の構成部品となり」、「サイバネティックスとコンピュータ」の時代に人間と機械は「相互に内的にコミュニケーションする関係」にあると規定されていた。（【MP】 p. 570－572）。

二つ目の「賃金労働者の包摂のされ方」について【ロルドン 2012】^{ix}は、「実質的包摂」とは「資本蓄積の論理の為に人間の全生活を従属させること」であり、「賃金労働者の精神の完全な植民地化、労働者の感情や行動的潜勢力を全て動員しようとする企て」だと言う。D&G は、この包摂や動員において貨幣が主観性に対し決定的影響力を持つと理解し、マルクス貨幣論・信用論への回帰を主張していた。『アンチ・オイディプス』で彼らは、「欲望の統合が為されるのは・・貨幣の流れの次元において」であり、融資の流れと支払手段の流れという異質な二つの流れが貨幣という一つの尺度で測られる点に資本主義の最大のトリックがあると看破していた。（【AO】 p284, 271）^x

三つ目の「主観性の生産の生産力化」について【Read2003】^{xi}は、「主観性の生産自体が資本にとり生産的となる」時代を我々は生きていると述べ、資本は「直接に生存の特異性と共同性を捉えようとする」と言う。これはつまり、我々が労働者としてのみならず特定のライフスタイルや美意識・価値観を持つ生活者・消費者としても生産性を持つ時代に生きていることを言うものであり、消費者参画型の商品開発や、特定の美意識や趣味嗜好等の商品化過程を思えば了解される認識だろう。或いは人間の実存的特性（コミュニケーション能力、愛想の良さ等々）が生産力となり企業活

動にとり不可欠となる事態を想起しても良い。この点について D&G は、聊か曖昧だが「余剰労働、資本主義的組織の総体は徐々に労働の物理社会的概念に対応する時空の条理化とは無縁になりつつ」あり、「資本主義は労働量に対してよりも複雑な質的過程に作用し、この過程は交通手段、都市モデル、メディア、レジャー産業、知覚や感じ方などの全記号系に関わるものとなりつつある」と述べていた。([MP] p. 614)。

以上より、マルクスが「実質的包摂」という言葉で示唆し、現代の理論家がその内実を検討しつつある資本主義の現代的状態を D&G が時代に先駆けて(時に断片的示唆に留まるものの、)認識していた点が確認された。次に、D&G 以外の論者も参照しつつ、彼らの為す政治的存在論の展開による資本主義批判の意義と課題を検討しよう。

4. D&G による資本主義批判の意義と課題

4. 1 D&G 哲学以外の資本主義批判理論との関係

「生成変化」・「戦争機械」・「逃走線」等の新奇な諸概念の創造により展開される D&G の政治的存在論については、「政治の新たな実践手法を与える」とする解釈や (J.Read)、「資本に相応しい発明の政治」(N.Thoburn)・「マルクスのでもなくリベラルでもない新たなユートピア的政治」(P.Patton)を産み出した、とする解釈などの肯定的評価もある一方、その意義を評価しない論者もあり、価値評価が難しい状況が続いている。

本稿ではここで、現代を代表する資本主義批判の理論家ネグリ&ハートと経済地理学者ハーヴェイの議論とを参照してみたい。筆者の見たところ両者は、資本主義批判に向かうグローバルなレベルでの同盟や運動の必要性を強調する点では共通している。例えばネグリ&ハートは現在のグローバル秩序を独特の観点から「帝国」と捉え、その対抗者として「帝国を維持する生産力であると同時に、その破壊を呼び求め必然的なものとする力」

である「マルチチュード」という形象を提出し、それを主体としつつ「グローバルな次元で何らかのオルタナティブを提示することが必要」だとする^{xii}。他方、ハーヴェイは D&G の概念(「アサンブラージュ」)に言及しつつ、社会を「多くの様々な種と活動形態から成る生態系に似た」、「資本主義の歴史的進化の中で様々に共進化する」7つの活動領域の弁証法的絡み合いと捉える。その上で「共進化するシステム内部の全活動領域が何らかの形で連動して動く場合にのみ、資本主義的支配とは大きく異なる全面的な革命の変容を我々は語りうるだろう」と述べ、「その周囲に社会行動が結集し回転する共革命的な諸ポイント」としての「共通の目標」・「一般的な指導原則」が必要だと主張する。^{xiii}彼らの立場から見ると、D&G の議論は「具体性の不足」や「グローバルな秩序の忘却・ローカルで特殊なものへの執着」により不十分なものとされることとなるが、この批判をどう捉えるべきだろうか。

畢竟、問題は D&G が理論構築した時代から 30~40 年の時が流れ、マイナー性やミクロ性を強調し、部分的変革実践を肯定する D&G の姿勢が時代遅れの抵抗戦略となってしまったのかどうか、という点にある。「マイナー性・ミクロな部分的変革実践」として近年の D&G 研究者が挙げる具体例は、「マッドサイエンティスト、新たなサブカルチャーや対抗文化イノベーション、社会的政治的危機」([Thoburn2003] p. 98)、「1980 年代の自由ラジオ、1960~70 年代のコミュン、インターネット」([Pellejero2009] p. 108) 等である^{xiv}。ポイントはこれらの「オルタナティブな活動や空間」が暫くの間、資本主義的生産に組み込まれないとされる点にあるのだが、この点については、「オルタナティブはたちまち資本主義的再生産の支配的实践に再吸収されてしまう」故に、寧ろ「支配的实践がいかに機能するかを明瞭に暴露すること」が重要だとするハーヴェイのような立場もあれば ([Harvey2011] p. 242)、近年活発な「オルター・

グローバリゼーション運動」(以下 AGM) と D&G 哲学との繋がりを指摘し肯定的に評価する論者も散見される (【Lenco2011】 p. 164 など)。

これらの問題系について本稿では最終的結論を下すことはせず、理論的に以下の二点のみを指摘しておきたい。一点目として、ハーヴェイの言う「オルタナティブな空間」の「支配的实践への再吸収」の分析に関しては、D&G が『千のプラトール』で構築する「捕獲装置」概念を改鑄しつつ理解の深化に貢献できると推測される。二点目として AGM に関しては、それが D&G の組織論や同盟論と正確にはいかなる関係を取り結びうるか、個別現象に関する経験的調査を織り込みつつ、探究する必要がある。

以上の、他の理論家からの D&G 評価と検討課題を踏まえつつ、次に「資本主義への抵抗」の意味について検討しよう。

4. 2 「資本主義への抵抗」の存在論的基礎付け

現在の資本主義社会の状況は、見方によってはかなり切迫しており、絶望的状况だと認識もある。D&G が「実質的包摂」状態を予感的に認識していた点は先に述べた通りだが、マルクス主義的伝統に D&G 以上にコミットする【Read2003】はこの段階に至り、「一方で資本がますます生ける労働の協働的ネットワークに依拠する限りで主観性は最大限の力を持つが、他方で協働的力がたえず資本の力と見なされる限りで最大限の従属下に置かれる」と言う (p. 18)。現在、資本と労働との対立の緊張度は増している。【Read2003】はこの「矛盾を様々な角度から検討し、新たな概念を産み出すに至るまでその発展の流れを追うこと」を提案するに留まるが (p. 151)、ネグリ&ハートはこの「共産主義への潜勢力」としての主観性に賭ける立場だと言えるだろう。

他方、D&G 研究者の中には、現代の資本主義と D&G 哲学の根本論理との親和性が高まってきた

点を指摘する論者が散見される (【Thoburn2003】、【Lenco2011】等)。特に【Albetsen&Diken2006】^{xv}は、「資本主義の新たな精神」を「プロジェクトの体制」と名指し、それは「ネットワーク的モビリティ・・連結主義に価値を与え」、「受動性に対し能動性、同質性に対し異質性、固定化と規則に対し創造的变化を重視する」もので、「かつて資本主義を批判しえた批判」は、いまや資本主義的イノベーションに貢献している」と言う。D&G 自身が既に『哲学とは何か』において、彼らの哲学の核を為す「概念」と「出来事」がマーケティングに略取されたと嘆いていたが^{xvi}、「権力自体がノマド的に振る舞う時代」(【Albetsen&Diken2006】 p. 245)、「資本主義も国家も平滑空間を基礎として作動する」時代 (【Escobar&Osterweil2012】 p. 202) ^{xvii}に、いかなる形で「資本主義への抵抗」が可能だろうか。

【Vahamaki&Virtanen2006】^{xviii}は、D&G のプロジェクトを「資本主義の革命的变化の形而上学」だと表現する。筆者はこれに概ね賛同するが、聊か「形而上学」という言葉の意味を鮮明に捉え難い為、D&G 哲学は「資本主義への抵抗」に関する「存在論的基礎付け」を与えようとする議論だと表現したい。しばしば指摘されるように、D&G の議論は、歴史的具体的事象を分析する側面とより抽象的な存在論を語る側面との混合体として成立している。これは資本主義論の文脈に即して言えば、グローバル資本主義に関する歴史的具体的分析と、資本主義社会に関する抵抗を基礎づける存在論との二つを D&G が提出していることを意味する。ドゥルーズの、歴史の時間上に生じる「革命」ではなく、人々の「革命一生成」を信じるという発言の趣旨もこの文脈で捉えられねばならない。^{xix}但し逆に言えば、特定の歴史状況における個別行為者が持つべき抵抗戦略を一般的な形で提示することを彼らはしないし、できない。例えば D&G は賃金労働者が「資本の平面」から逃れる時に革命的になると言うが (【MP】 p. 589)、その手

法の具体的提案はない。貨幣を通じた資本主義への欲望の備給をいかに解除するか等の問題についても、D&Gに明瞭な解答は期待できない。代わりに提示されるのは、自分自身の「領土」や「地層」の中から慎重に「逃走線を描くこと」や「多様体を創ること」という、聊か抽象度の高い呼びかけに留まる。彼らは言う。「我々が為すべきことがここにある。即ち一つの地層に身を落ち着けること、それが我々に与える機会を用い実験すること、そこに望ましい場所や脱領土化の運動、可能な逃走線を探すこと、また、其処此处で流れの結合を見出し確かなものとする、部分ごとに強度の連続体を試みること、常に新たな大地の薄片を獲得すること。」(【MP】p.199)

このような「資本主義への抵抗」に関する「存在論的基礎付け」の議論がいかなる意味を持つかは、最終的にはそれを解釈し利用する者の立場により変動すると言える。筆者は考えている。議論の抽象度の高さと具体的目標の不在を以てその無効性を強調する立場もありうるだろう。しかし本稿としてはなお、彼らの抽象的議論をなるべく具体的な方向で継承・発展させる為の方向性と課題を見定めたい。必要となる作業は、D&Gによる「多様体の存在論的優位性」という認識、及び「生成変化」の内実、これら二つに関する現時点での議論状況の把握と課題の見積もりとなる。

4. 3 「多様体の存在論的優位性」と「生成変化」に関する議論状況と課題

まず、「多様体の存在論的優位性」というD&Gの社会認識の核心については、ここで詳細に論ずる余裕は無いが、資本主義批判という文脈で言えば、冒頭にも述べたように、D&Gが資本主義による「公理系への回収」の運動の只中に「システムから逃れ続けるもの」が不可分的に生じ続けると考えていた点が、この認識に該当する。

具体的場面に引き寄せた興味深い議論は、【Lazzarato2004】のものである^{xx}。彼によると、

現在の資本主義企業は多様体が行う協働作業を搾取する。例えばソフトウェア開発において企業は、開発者達の産出した共同財を知的所有権の論理の下で搾取し、利益を挙げている^{xxi}。ポイントは、企業により捕獲される前に多様体（無数のプログラマーの協働的ソフトウェア開発作業）による創造行為が可能であることである。この協働作業が企業の論理に従属させられることで、発明者達の多様体の行動力が制限され、協働に伴う喜びの感情も損なわれているという。翻って【Lazzarato2004】は、このように貧弱化された在り方から抜け出て、「雇用への従属から逃れる新たな活動様式の発明」や、「発明を企業価値ではなく共同財の創造と実現の為に用いること」を提案しつつ、その為には「新たな権利」を巡る闘争も必要だと言う (p. 141)。

この議論は確かに、D&G哲学の方向性を独自に展開しているものである。但し、「搾取の在り方」や「協働の喜びの感情」が企業への捕獲により損なわれているという理解については、より詳細な内実の検討が必要であろう。【Lazzarato2004】以外、「多様体の存在論的優位性」という命題を資本主義批判の文脈で具体的に展開した論者は管見の範囲では見当たらない。そこで、「多様体の捕獲」の他の事例の探究が必要ともなろうが、他方で理論的には、『千のプラトー』における「労働」と「自由活动」との対比的理解を提出する場面の再検討が必要である。D&Gによれば、「国家こそが様々な活動の比較基準としての労働を産み出す」のであり、測定され交換されない活動が「非生産的労働やレジャー活動」と位置づけられる。「余剰労働が存在しないところには労働モデルも存在せず、自由活动の連続変化があるのみだ」とする彼らの議論は、国家と貨幣及び抽象労働との緊密な関係を幾つかの論拠を基に指摘しているが、この議論の有効性は未知数である。再度この議論を洗い直し、現代の労働論や搾取論とも対比させつつ、労働として捕獲されない自由活动の内実を明らかに

し、それと多様体概念との関連性をも明瞭化する必要がある（【MP】 p. 551-552, p. 611-614）。

次に「生成変化」については、「マイナー生成、女性一生成、分子一生成、革命一生成」などから構成されるこの概念が捉え難いのは確かだが、或る程度の共通了解は形成されてきている。まず確かなのは、それがメジャーな基準からの逸脱を含む点であり、この点を強調する論者も散見される。^{xxii} 但しやはり最も重要なのは、【Sibertin-Blanc2013】^{xxiii}が言うように、この運動が様々な二項対立を揺るがす「新たな生存様式の発明」へと繋がる点である。ここでは「その闘争の実践的スタイル・設定する問題などの内在的評価」が必要ともなる（【Sibertin-Blanc2013】 p.222）。

「生成変化」は誰にでも開かれている。
【Roffe2007】^{xxiv}の整理を借用すれば、それは「脱個体化」とそれに引き続く「世界における新たな存在の仕方・集団的主体性」の構成から成る。重要なのは、この過程が個人の意志を超えた出会いを契機として始まり「潜在性を掴むこと」と表現される点である。「出会われるもの」である「出来事」に関しては、かつてよりその内実に関する解釈問題が存在するが^{xxv}、いずれせよ「生成変化」が意志されざる形で始まることは動かない。また、「潜在性を掴むこと」については様々な表現が可能だろうが、想像力が描き出す可能性を未来へと投射しその実現を図ることではなく、変容への可能性を「今・ここ」にある潜在性の中に見出すことだとは少なくとも言えよう。【Lenco2011】はそれを、「社会的地平に浸透する内在的関係性を再び作動させることへの感性」と表現している（p. 181）。

こう規定される「生成変化」は、その非意志的かつ偶然的な始まり方・展開される集団的主体性に関する価値評価の難しさ・大局的状况に及ぼしうる影響力の未確定性などを理由に批判されうるし、現時点での資本主義批判に向けた戦略として最適なものか否かに関する議論も可能ではある。

但し D&G のこの議論が、各個人がいかなる状況に置かれていても、各人が在るその場所に潜む潜在性からの抵抗や創造が可能であることを原理的次元で描き出した意義は、資本主義社会が今後いかなる変貌を遂げようと、意味を持ち続けると言えるのではないだろうか。この意味で、D&G の議論は「資本主義への抵抗」に「存在論的基礎づけ」を与えるものとも言えるのではないかと筆者は考えている。この根本的論点を押さえた上で、「生成変化」に関しては、具体的な資本主義社会の現状を凝視しつつ、更にその細部、即ち、「生成変化」に伴う感情や情動の問題^{xxvi}、労働現場における「生成変化」の可能性の問題^{xxvii}、同盟の構成の問題^{xxviii}、グローバル資本主義へ与える影響の問題等を今後、検討していかなねばなるまい。

5. 終わりに

本稿では、筆者自身の力で今後、資本主義社会を批判的に思考し直す為の準備作業の意味を込めて、（特に本国フランスよりも活発に研究書が出版されている英語圏の）先行研究・解釈を広く渉猟しつつ、D&G の資本主義論を再検討し、彼らの資本主義理解や資本主義批判が現在の理論状況から見ていかに位置づけられるかに関する理解を提出すると同時に、今後の検討課題を抽出してきた。

以下、本稿での考察の成果を改めて纏めることで、結論に代えたい。1) D&G による資本主義に関する「内部からの批判」の意味が明瞭化された。2) D&G による資本主義の「実質的包摂」段階に関する先駆的認識の存在が明瞭化された。3) D&G の資本主義批判が資本主義への抵抗に対し「存在論的意味付け」を与えるという理解が提出された。4) D&G による資本主義批判を継承・発展させるべく「マイナー性・部分的変革実践」、「多様体の存在論的優位性」、「生成変化」について具体的な歴史的社会的現象への参照も行いつつ、検討を加えていく必要があるとの認識に到達した。^{xxix}

註

- i “L’anti-Édipe”, Gilles Deleuze & Félix Guattari, Les Éditions de minuit, 1972, “Mille Plateaux”, Gilles Deleuze & Félix Guattari, Les Éditions de minuit, 1980
- ii 【Patton2012】 “Deleuze’s political philosophy”, Paul Patton, in “The Cambridge Companion to Deleuze”, Daniel W. Smith & Henry Somers-Hall ed., Cambridge University Press, p.198-199
- iii 【Garo2008】 “Molecular Revolutions: The Paradox of Politics in the Work of Gilles Deleuze”, Isabelle Garo, in “Deleuze and Politics”, Ian Buchanan & Nicholas Thoburn, Edinburgh University Press, p.61
- iv 【Choat 2009】 “Deleuze, Marx and the Politicisation of Philosophy”, Simon Choat, in “Deleuze and Marx”, Dhruv Jain ed., Edinburgh University Press, p.17
- v 「宇宙の極限に支配者のイメージや国家の観念、秘密政府の観念を投影する時、人は滑稽かつ虚構的な表象に陥る。国家よりも株式市場の方が、流れとその量子についてはるかに適切なイメージを与える。」(【MP】 p.276)
- vi 【Lenco2011】 “Deleuze and World Politics: Alter-Globalizations and Nomad Science”, Peter Lenco, Routledge, p.176
- vii 【Thoburn2003】 “Deleuze, Marx and Politics”, Nicholas Thoburn, Routledge, p.78
- viii 「資本主義の独自性は社会機械が不変資本として社会体の充実身体に付着する技術機械を部品とし、技術機械に付属する人間を部品としない点にある」(【AO】 p.299)。
- ix 【ロルドン 2012】 『なぜ私たちは、喜んで“資本主義の奴隷”になるのか？新自由主義社会における欲望と隷属』(F・ロルドン著/杉村昌昭訳、作品社) p.10-12
- x ドゥルーズが晩年、現代の賃金労働者が己の活躍や昇進に向けての動機付け・研修・生涯教育を求める欲望を持つ点に注目し、感情や動機等の主観的観点からの資本主義への欲望の備給に言及した点も想起したい。“Pourparlers”, Gilles Deleuze, Les Éditions de minuit, 1990, p.242-243 (以下【PP】と表記)
- xi 【Read2003】 “The Micro-Politics of Capital — Marx and the Prehistory of the Present”, Jason Read, State University of New York Press, p.136, p.151
- xii 【Negri & Hardt 2000】 “Empire”, Antonio Negri & Michael Hardt, Harvard University Press P.61-62, p.206
- xiii 【Harvey2011】 “The Enigma of Capital and the Crises of Capitalism”, David Harvey, Profile Books, p.128, p.207, p.230-231
- xiv 【Pellejero2009】 “Minor Marxism: An Approach to a New Political Praxis”, Eduardo Pellejero, in “Deleuze and Marx”, Dhruv Jain ed., Edinburgh University Press
- xv 【Albetsen & Diken 2006】 “Society with/out Organs”, Niels Albetsen & Bulent Diken, in “Deleuze and the Social”, Martin Fuglsang & Bent Meiner Sorensen ed., Edinburgh University Press, p.245-247
- xvi “Qu’est-ce que la philosophie?”, Gilles Deleuze & Félix Guattari, Les Éditions de minuit, 1991, p.15
- xvii 【Escobar & Osterweil 2012】 “Social Movements and the Politics of the Virtual: Deleuzian Strategies”, Arturo Escobar & Michal Osterweil, in “Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology”, Casper Bruun & Jensen Kjetil Rodje, Berghahn Books
- xviii 【Vahamaki & Virtanen 2006】 “Deleuze, Change, History”, Jussi Vahamaki & Akseli Virtanen, in “Deleuze and the Social”, Martin Fuglsang & Bent Meiner Sorensen ed., Edinburgh University Press, p.213
- xix 「革命の先には悪しき未来があると言われます。しかし人は二つの事柄、即ち、歴史の内部における革命の未来と、人間の革命—生成を混同しているのです。・・人間の唯一の可能性は革命—生成にある。恥辱を払い、耐え難いものに応答するのは革命—生成以外にはありません。」(【PP】 p.231)
- xx 【Lazzarato 2004】 “Les révolutions du capitalisme”, Maurizio Lazzarato, Les Empêcheurs de penser en rond
- xxi 【Lazzarato 2004】 p.118-119 「マイクロソフト社の活動は、多様体による共同的創造や共同的実現を無力化し停止させることにある。アジャンスマンの力能が・・企業の中に囲い込まれている。」「共同的創造と共同的実現の力の無力化と捕獲は知的所有権に依拠している。」
- xxii 【Albetsen & Diken 2006】 は「ドゥルーズ的な逃走線」を、「逸脱としての速度」・「必ずしも運動を伴わない逸脱」と表現する。(p.247)
- xxiii 【Sibertin-Blanc 2013】 “Politique et État chez Deleuze et Guattari: Essai sur le matérialisme historico-machinique”, Guillaume Sibertin-Blanc, P.U.F. 「マイナー生成の過程は

単なる逸脱ではない。カテゴリー化不可能なもの、数えられないものに場所を与え、二項対立を揺るがす。」(p.199)

xxiv 【Roffe2007】: “The Revolutionary Dividual”, Jonathan Roffe, in “Deleuzian Encounters : Studies in Contemporary Social Issues” ,Anna Hickey-Moody & Peta Malins,p.43

xxv 【Vahamaki&Virtanen2006】はこの周辺の状況について、「革命は我々が見たり経験したりした不正からは生じない。それは集中というよりは集中の失敗、放心状態を通して生じる」との興味深い解釈を提出している。(p.226)

xxvi 【Goodchild1996】: “Deleuze and Guattari: An Introduction to the Politics of Desire” ,Phillip Goodchild, Sage Publications,1996 は、現在の資本主義社会が社会全体に瀰漫させる不安や恐れに感情的に批判的に言及し、対比的に「喜び」の経験や体制への可能性を探究している。

xxvii 【Goodchild1996】の、「集团的労働経験は集团的意識の革命的变化を産み出しマイクロ政治的実験により連帯を産み出せる場所である」という命題の意義を、現在の労働の現実や理論を踏まえつつ見極める必要がある。

xxviii 【Sibertin-Blanc2013】は「マイナー生成の問題は最終的には同盟の構成の問題となり、この議論は・・・＜強度的普遍性の実践＞を思考させる」(p.224-225) と言う。

xxix 資本主義批判に向けての更に詳細な検討課題を列挙する。1) マルクス主義的諸概念(剰余価値・搾取・階級等)による資本主義把握と批判の有効性の再検討。2) D&G によるマルクス主義的諸概念の更新の再評価。3) 『千のプラトー』における「国際化された資本主義」分析の現時点での妥当性と有効性の検討(銀行・金融権力の位置付け等)。4) 貨幣の機能や現代的労働形態(非物質的労働・感情労働等)の議論を踏まえた上での、賃金労働者の持つ可能性の検討。5) 『千のプラトー』で創造される諸概念(マイクロ政治・生成変化・戦争機械・逃走線等)の構築のされ方の再把握と、各概念の応用可能性の検討。6) D&G と他の理論家の議論との資本主義批判に関しての接続可能性の検討(ネグリ&ハート、ハーヴェイ、ジジェクら)。7) 現代の資本主義に見合う形での「多様体の捕獲装置」概念の改鋳作業。8) 「労働/自由活動」概念の再検討と、「自由活動」の持つ現代的可能性の見極め。9) AGM と D&G 哲学との関係性を見極め(「同盟」概念の再検討)。10) 「生成変化」における「潜在性を掴むこと」の内的構成の更なる明瞭化。11) 「共同財」や「新たな権利」を巡る問題の検討。

青年層における運動負荷時の生理学的変化

— 運動量変化に伴う血圧および心拍数の変動について —

神戸夙川学院大学 観光文化学部教授 櫻井 一成

神戸夙川学院大学 観光文化学部教授 西村 典芳

【目次】

〔要 約〕

1. はじめに
2. 対 象
3. 方 法
4. 結果および考察
5. 今後の展望

〔参考文献〕

〔要 約〕

青年層の男女 42 名（平均年齢 16.9 歳）を検索対象とし、「運動経験あり」＝A 群（運動＋）：16 名、「運動経験なし」＝B 群（運動－）：26 名について、軽運動負荷による最高血圧および心拍数の関係について比較検討した。その結果、運動経験の有無にかかわらず、約 8 割の被験者において最高血圧値の上昇に連動して心拍数の増加が認められたが、血圧上昇に伴う心拍数減少が約 2 割にみられ、また血圧低下に伴う心拍数増加が 6 割に上ったことから、両群ともに「軽運動後」の血圧低下と心拍数の関係性は、極めて不安定であることが判明した。次に A 群 7 名、B 群 10 名に段階的運動負荷（「運動前」、「軽運動後」、「中等度運動後」）に伴う血圧および心拍数の推移について検討したところ、A 群においては、同負荷増強による「軽運動後」の血圧および心拍数の変動は軽微であった。従って、過去の運動習慣の積み重ねが潜在的基盤となり、軽運動を行うことによる情動の安定

化や心身のリラックス効果が誘導され、血圧と心拍数を安定化させるものと考えられた。一方、B 群では軽運動負荷の段階で血圧上昇傾向が示され、中等度の運動負荷が加わると血圧および心拍数の上昇幅が大きく振れることから、過去の運動経験や日常の運動志向が乏しい場合、健康・保健上リスクの増大を招来する可能性があるものと思われる。さらに A 群においては、中等度の運動負荷が加わった際においても、血圧および心拍数の変動が軽度であったことから、日頃の継続的な運動が、高血圧予防の観点からも健康維持・増進に欠かせないものであると言える（以上、データは本文参照）。

1. はじめに

運動時の血圧および心拍数（脈拍数）増加は、日常、よく見受けられる生理的变化である。われわれは、青年層における健康維持推進と健康指導に役立てることを目的として、安静時と運動負荷時（軽運動時および中等度運動時）における血圧および心拍数の変動について検討した。また被験者の運動経験の有無におけるこれらの変動についても比較検討し、考察を加えた。

2. 対 象（表 1）

2014（平成 26）年度に本学のオープンキャンパスに参加し、協力の得られた 15～17 歳の男女 42 名（中学生 1 名、高校生 41 名）を検索対象とした。被験者の平均年齢は 16.9 歳、男女比は 1 : 3.2（男

表1 運動負荷による血圧および心拍数の変化 (n=42)

	性別・ 年齢	運動経験 (3年以上)	運動前(安静時)			軽運動後			中等度運動後		
			血圧 H	血圧 L	心拍数	血圧 H	血圧 L	心拍数	血圧 H	血圧 L	心拍数
A-1	17 M	サッカー	129	59	71	138	63	76			
A-2	17 M	バレーボール	97	51	65	109	84	79	134	92	105
A-3	17 M	バレーボール	124	77	75	123	73	91			
A-4	17 F	陸上/水泳	129	86	85	123	76	75	126	80	84
A-5	17 F	ダンス	153	109	71	135	90	70			
A-6	17 F	陸上	100	58	67	111	65	64			
A-7	17 F	陸上	112	55	60	104	53	66	110	53	72
A-8	17 F	ソフトボール	156	71	65	194	84	76			
A-9	17 F	ハンドボール	103	68	63	109	76	72			
A-10	17 F	バレーボール	100	64	47	132	83	58			
A-11	17 F	バレーボール	114	65	84	137	75	101			
A-12	17 F	バレーボール	104	59	81	99	56	77	100	59	90
A-13	17 F	バレーボール	133	69	76	123	75	75	131	62	79
A-14	17 F	バレーボール	97	64	45	92	59	72			
A-15	17 F	卓球	127	77	72	120	77	76	122	74	83
A-16	17 F	テニス	107	56	56	103	69	68	121	80	89
B-1	17 M	—	179	105	72	163	82	71			
B-2	17 M	—	142	86	80	119	71	66			
B-3	17 M	—	115	79	81	127	64	75			
B-4	17 M	—	132	42	79	126	54	99			
B-5	17 M	—	109	68	78	124	67	74	145	89	118
B-6	17 M	—	116	80	78	128	82	88	140	85	109
B-7	17 M	—	123	77	79	129	86	86	143	82	114
B-8	16 F	—	127	68	68	117	76	73	133	78	112
B-9	17 F	—	115	73	91	130	81	88			
B-10	17 F	—	137	100	102	151	91	126			
B-11	17 F	—	120	80	63	135	78	84	111	57	108
B-12	16 F	—	133	76	72	136	79	83			
B-13	17 F	—	120	66	78	123	61	84			
B-14	17 F	—	124	83	87	132	92	96	145	102	129
B-15	17 F	—	96	63	55	108	64	86			
B-16	17 F	—	86	57	77	105	57	85	122	68	99
B-17	17 F	—	103	69	73	100	63	78			
B-18	15 F	—	111	67	69	118	43	67			
B-19	17 F	—	102	63	37	110	71	72	130	88	96
B-20	17 F	—	108	71	95	120	74	100	133	82	122
B-21	17 F	—	106	79	79	77	57	91			
B-22	17 F	—	99	74	74	107	59	48			
B-23	17 F	—	111	84	84	137	62	102			
B-24	17 F	—	96	63	81	106	69	90			
B-25	17 F	—	118	67	77	127	74	86			
B-26	16 F	—	104	71	69	121	75	90	131	77	106

表中の一はクラブ活動での運動経験なし。色付き**太数字**は血圧・心拍数上昇を示す（対運動前）。また、血圧Hは最高血圧、血圧Lは最低血圧（各 mmHg）を示す。

性 10 名、女性 32 名）であった。また全被験者のうち中学および高校在学中に体育会系サークルに在籍し、3 年以上の活動歴を有する生徒を「運動経験あり」、それ以外の生徒を「運動経験なし」とし、前者をA群（運動+）、後者をB群（運動-）に分け、各々記番号を付与した。なおA群（運動+）は 16 名（男性 3 名、女性 13 名）、B群（運動-）は 26 名（男性 7 名、女性 19 名）であった（表 1）。

3. 方法

各被験者について、5 分程度の会話後、リラックスした状態で血圧および心拍数の測定（OMRON 社製、デジタル自動血圧計 HEM-1000 使用）を行い「運動前（安静時）」所見〔＝MET（metabolic equivalent）¹ 1.5 相当の身体活動強度〕とした。次に、乗馬運動器具（大東電機工業社製、ロデオボーイ、）による騎乗運動 10 分間＋卓球 10 分間、あるいは卓球 15 分間による軽運動を課し、運動直後に同様の測定を行い「軽運動後」所見〔＝MET 4.0 相当の身体活動強度〕とした。さらに協力の得られたA群（運動+）の 7 名（男性 1 名、女性 6 名）、B群（運動-）の 10 名（男性 3 名、女性 7 名）について

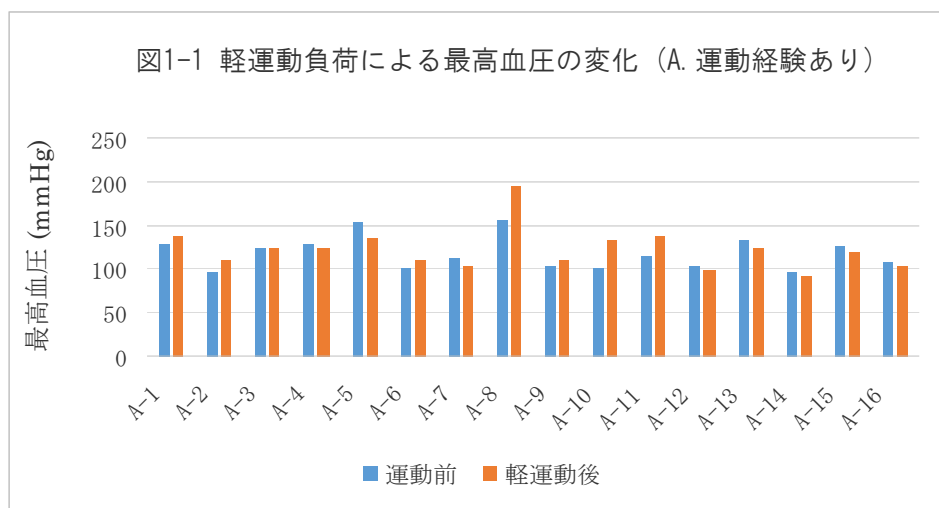
は、軽運動に加え中等度の運動（硬式テニス・ストローク練習、25～30 分間）を課し、同運動直後に同様の測定を行い「中等度運動後」所見〔＝MET 7.0 相当の身体活動強度〕とした。

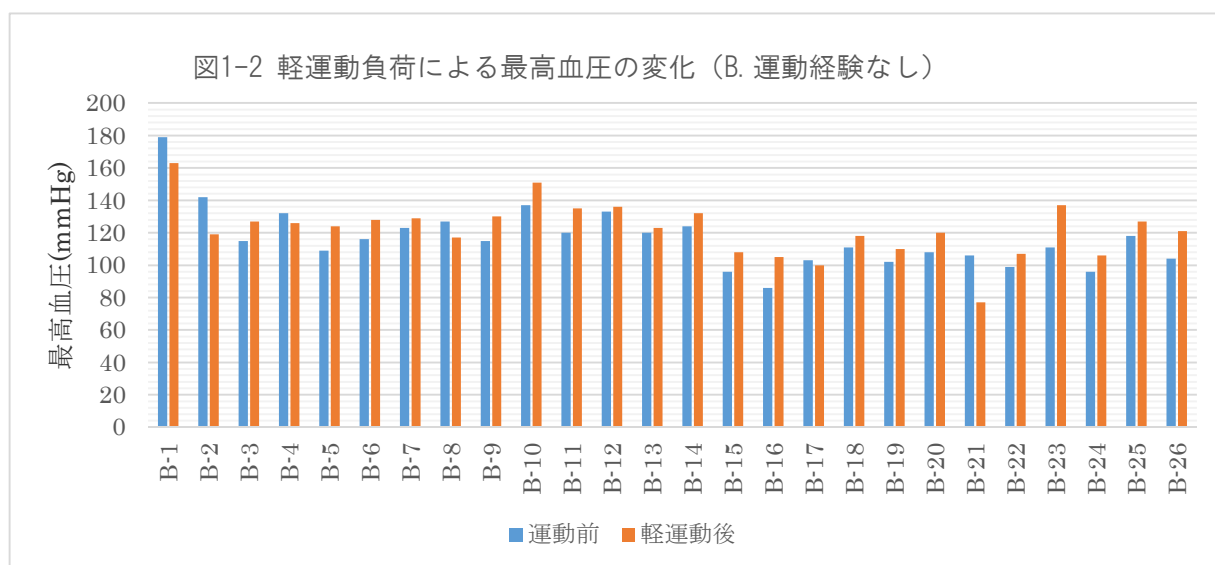
4. 結果および考察

1) 軽運動負荷による最高血圧の変化

血圧の所見については最高血圧（収縮期血圧）値を検討の指標とした。全被験者における「軽運動後」の最高血圧値上昇は 27/42 名（64%）に、同下降は 15/42 名（36%）にみられた。従って、軽運動の負荷は、約 2/3 の被験者に最高血圧値上昇を、また約 1/3 に同低下をもたらすことが判明した。なお上昇率の最高は 32%増（被験者 A - 10）、下降率の最高は 27%減（被験者 B - 21）であった（表 1）。

次に両群間における軽運動負荷による最高血圧値の変化について比較検討したところ、A群（運動+）における最高血圧値上昇は 7/16 名（44%）、同下降は 9/16 名（56%）にみられ、B群（運動-）では、同上昇が 20/26 名（77%）であったのに対し、同下降は 6/26 名（23%）に留まり、両群間に明らかな相違が認められた（図 1-1, 図 1-2）。





本所見よりA群（運動+）においては、軽運動負荷により血圧下降を示す被験者が血圧上昇を示す者を上回り、過去の運動習慣の積み重ねが軽運動による血圧下降を誘導する傾向があることを示唆し、短時間の軽運動が心身のリラックス効果をもたらし、血圧低下に導く可能性があるものと考えられた。一方、B群（運動-）における8割弱の被験者に軽運動負荷による最高血圧値上昇が示された。本所見は、運動経験がないか日常の積み重ねが乏しい場合、軽運動負荷が血圧上昇を導き、健康・保健上のリスクに繋がる可能性があるものと考えられた。

2) 軽運動負荷による心拍数の変化

また全被験者における「軽運動後」の心拍数の増加は、30/42名（71%）に、同減少は12/42名（29%）にみられた。従って、軽運動の負荷は、約7割の被験者に心拍数増加を、また約3割に同減少をもたらすことが判明した。なお上昇率の最高は60%増（被験者A-14）、下降率の最高は35%減（被験者B-22）であった（表1）。

次に両群間における軽運動負荷による心拍数の変化について比較検討したところ、A群（運動+）における心拍数増加は11/16名（69%）、同減少は5/16名（31%）にみられ、B群（運動-）では、同増加が19/26名（73%）であったのに対し、同減少は7/26名（27%）で、両者間

に有意な差は示されなかった（図1-1、図1-2）。

3) 軽運動負荷による最高血圧および心拍数の関係

全被験者において、「軽運動後」の最高血圧値上昇とともに心拍数の増加が示された者は21/27名（78%）で、最高血圧値低下に連動して心拍数の減少がみられた被験者は6/15名（40%）であった。従って、運動経験の有無にかかわらず、約8割の被験者において最高血圧値の上昇に連動して心拍数の増加が認められたが、最高血圧値上昇とともに心拍数の減少がみられた者が6/27名（22%）＝約2割、そして最高血圧値低下に連動して心拍数増加がみられた被験者が10/15名（60%）＝6割に上り、とりわけ「軽運動後」の最高血圧値低下と心拍数の増減の関係については極めて不安定であることが判明した（表1、図1-1、図1-2）。

4) 段階的運動負荷に伴う最高血圧および心拍数の推移

全被験者の中で同意を得たA群（運動+）の7名（男性1名、女性6名）およびB群（運動-）の10名（男性3名、女性7名）については、軽運動直後の血圧および心拍数測定後に中等度の運動を課し、同運動直後に同様の測定を行い「中等度運動後」所見として、「運動前」、「軽運動後」および「中等度運動後」の3者について

比較検討した（表 1）。

A 群（運動+）における「軽運動後」の最高
 血圧値の上昇は 7 名中 1 名（14%）のみ、「中等
 度運動後」に継続して同値の上昇がみられたの
 は本例を加えて計 2 名（28%）に過ぎなかった。
 また「軽運動後」の同値下降は 6/7 名（86%）
 に上り、「中等度運動後」においても 5/7 名
 （72%）に同値低下が示された（図 2-1A）。一
 方、運動に伴う心拍数増加は、「軽運動後」が

4/7 名（57%）、「中等度運動後」が 6/7 名（86%）
 であった（図 2-1B）。また B 群（運動-）にお
 いては、10 名中 9 名（90%）に「軽運動後」お
 よび「中等度運動後」の最高血圧値上昇が示さ
 れ、これらの運動後における同値低下は各 1 名
 （各 10%）にみられるに過ぎなかった（図 2-2A）。
 一方、心拍数については、「軽運動後」が 9/10
 名（90%）に、「中等度運動後」には全員（100%）
 に増加がみられた（図 2-2B）。

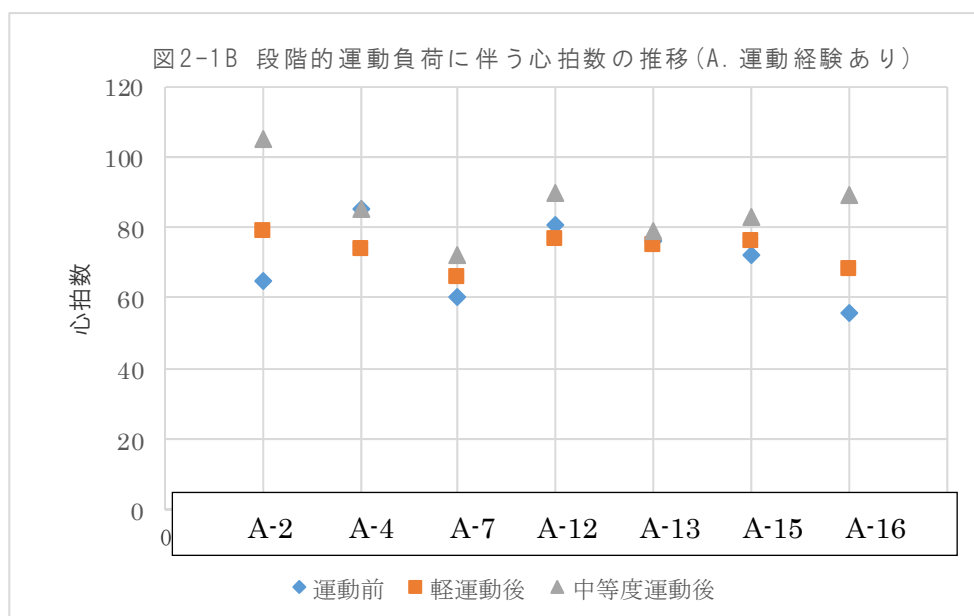
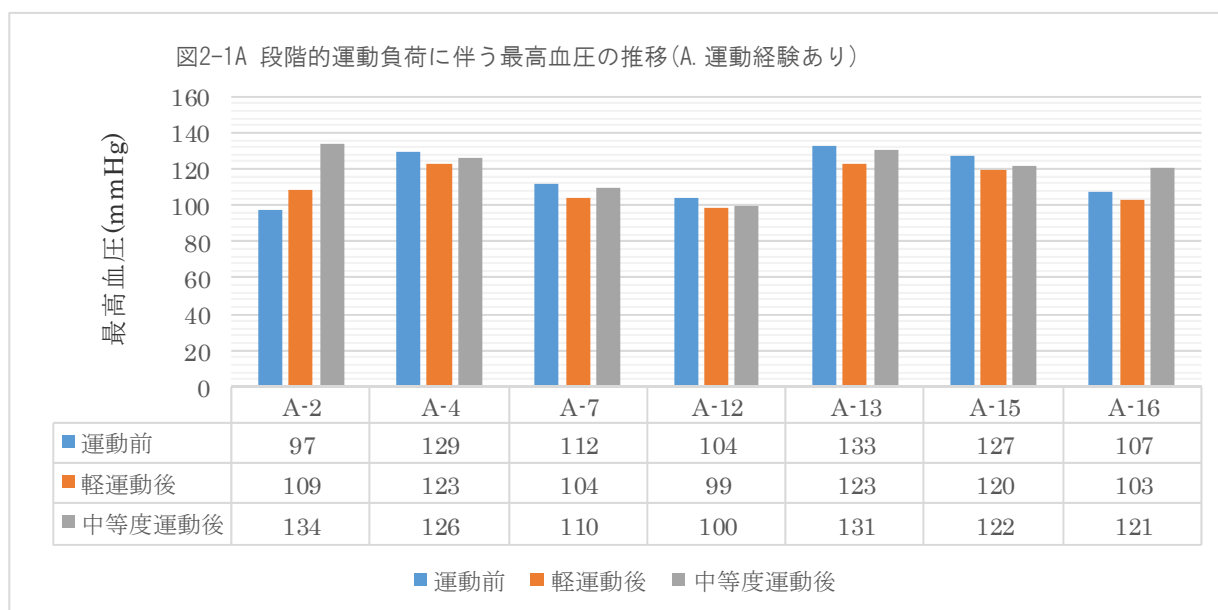


図2-2A 段階的運動負荷に伴う最高血圧の推移 (B. 運動経験なし)

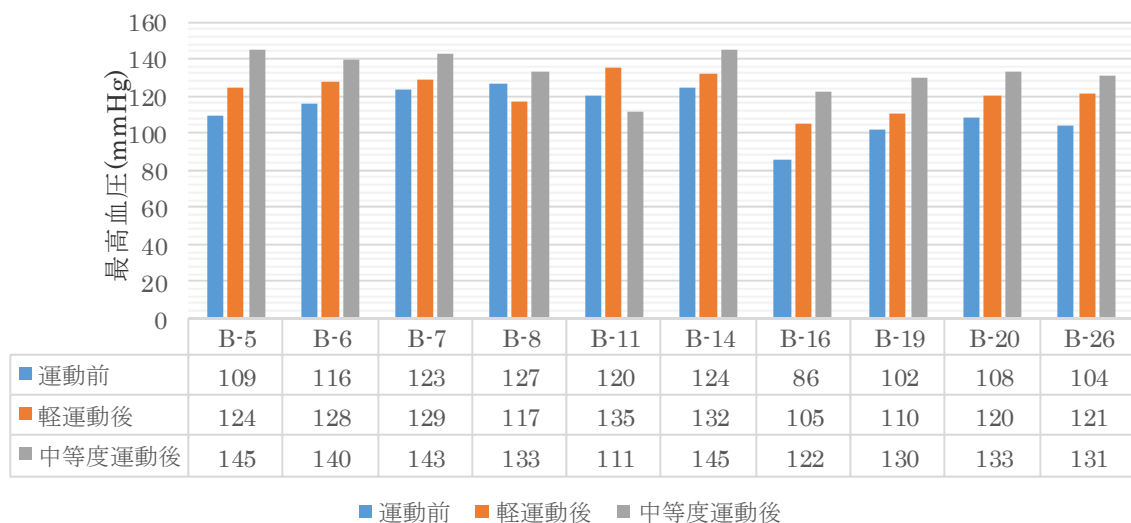
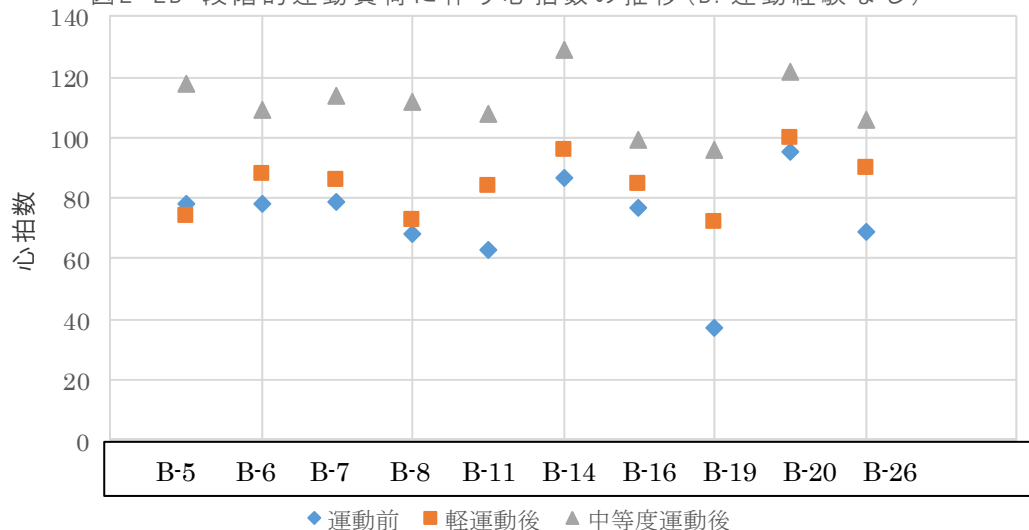


図2-2B 段階的運動負荷に伴う心拍数の推移 (B. 運動経験なし)



5) 段階的運動負荷に伴う最高血圧および心拍数各平均値の推移

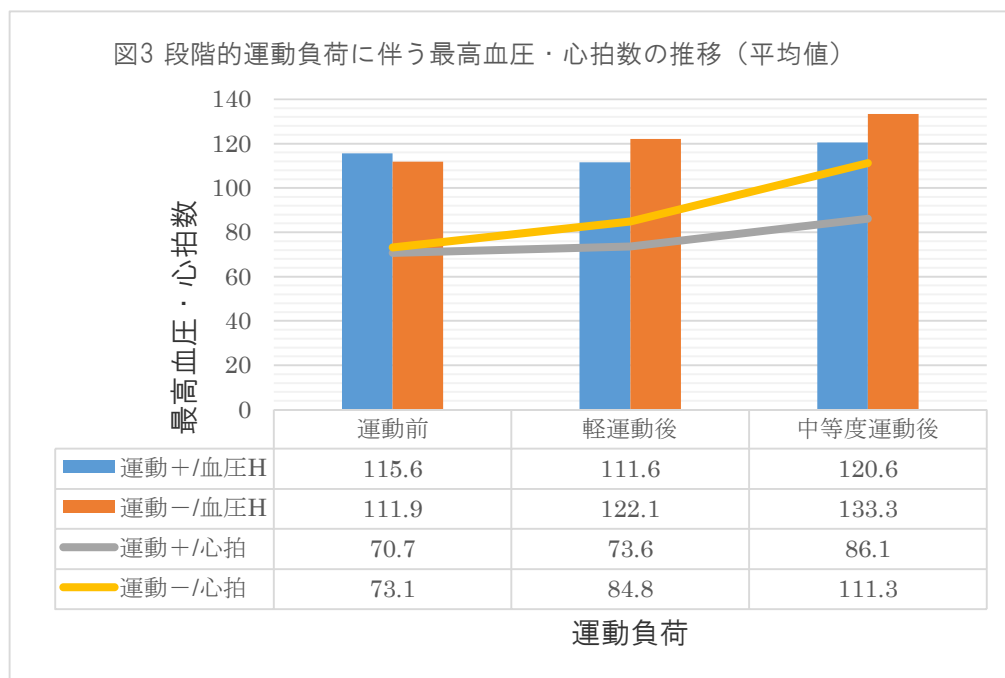
次に、上記A群（運動+）およびB群（運動-）における最高血圧および心拍数の平均値の推移について検討した。最高血圧の平均値（mmHg）は、A群（運動+）で「運動前」：115.6、「軽運動後」：111.6（3.5%低下）、「中等度運動後」：120.6（7.5%上昇）と「軽運動後」に一旦低下してから「中等度運動後」に上昇に転じたのに対し、B群（運動-）では、「運動前」：111.9、「軽運動後」：122.1（8.4%上昇）、「中等度運動

後」：133.3（8.4%上昇）と段階的（比例的）上昇がみられ、A群（運動+）に比べて上昇幅が大きかった。

また心拍数の平均値については、A群（運動+）で「運動前」：70.1、「軽運動後」：73.6（4.8%増）、「中等度運動後」：86.1（14.5%増）と増加傾向が示され、B群（運動-）においても、「運動前」：73.1、「軽運動後」：84.8（13.8%増）、「中等度運動後」：111.3（23.8%増）と増加傾向がみられた。心拍数については、両群とも一貫した増加傾向を示したが、両者を比較すると、

A群（運動+）では「軽運動後」の心拍数増加率が4.8%と軽微であるのに対し、B群（運動-）では13.8%と約3倍近い心拍数の増加率を呈した。「運動前」と「中等度運動後」の心拍数

の増加率を比較した場合、前者が19.3%であったのに対し、後者は37.6%に達し、B群（運動-）はA群（運動+）に比べて2倍近い増加率となった（図3）。



以上の所見より、「運動前」、「軽運動後」、「中等度運動後」と段階的な運動負荷増強により、総じて最高血圧値の上昇に連動して心拍数の増加が示されたが、A群（運動+）における「軽運動後」所見において、最高血圧値および心拍数の変動が軽微であったことを勘案すると、過去の運動習慣の積み重ねが潜在的基盤となり、軽運動を行うことによる情動の安定化や心身のリラックス効果が誘導され、血圧と心拍数を安定化に導くものと考えられる。一方、B群では軽運動負荷の段階で最高血圧値の上昇傾向が示され、中等度の運動負荷が加わることで、最高血圧値および心拍数の上昇幅が大きくなることが判明した。従って、過去の運動経験や日常の運動志向が乏しい場合、健康・保健上リスクの増大を招来する可能性があるものと思われる。さらにA群においては、中等度の運動負荷が加わった際においても、血圧および心拍数の変動が軽度であったことから、定常的な有酸素運動が血圧の安定化と変動（上下動）の抑制を

もたらし、血液循環動態の改善や高血圧予防の観点からも健康維持・増進に欠かせない方策であると言える。



〈写真：参加学生らと著者。テニスコートにて〉

6) 運動による生理学的変化のメカニズム

運動時は、諸器官が酸素供給を必要とすることから心拍数が増加し、血圧を上昇させて送血量、すなわち循環血液量を急激に増やす必要性が生じる。運動後は、酸素を多量に運搬する必要がなくなり、心拍数の減少により循環血液量

を減らし、心拍数は徐々に安静時の値まで戻る。また、運動負荷（運動量）を増すと、血圧と心拍数の上昇が著明になり、その場合、回復に時間を要するものと考えられる。

このように、運動負荷による心拍数と血圧の上下動には同調性が示され、本研究においても概ね同様の所見が示された。しかし、運動負荷後に心拍数と血圧値が共に低下した例や、両者の同調が示されなかった例も散見された。運動中は、酸素や栄養分の補給が消費に追いつかなくなるため、心拍数と血圧を上げて虚血、すなわち酸素欠乏にならないように備える。しかし、普段から運動習慣を有する場合は、同習慣が無いか乏しい場合と比較して、既に運動負荷状態が日常生活における活動の一部として同化している。従って、軽運動程度あるいは中等度運動の負荷が加わったとしても、血液循環量を急激に増やす必要性が生じなくなることから、運動時の心拍数減少に伴う血圧低下が招来され、また、心拍数と血圧間の不調和がみられる可能性がある。こうした傾向は、定常的に行っている運動の強度が、今回行ったような軽運動や中等度運動の運動強度を上回る場合に顕著となるものと考えられ、逆に、運動習慣が乏しい程、例え軽運動負荷であっても、心拍数増加や血圧上昇を招きやすいものと推察される。従って、普段からの運動習慣が日常の血圧および心拍数の安定効果、すなわち、高血圧抑制効果に繋がるものと考えられる。また、運動時の心拍数および血圧の不安定、あるいは両者間の不調和を来す要因としては、運動中の情動の変化（楽しい、試合で緊張する、叱責されたなどのストレス）、環境因子（暑さや寒さ、湿度）、および内因性因子（体温、代謝状態、内分泌、水分の過不足、塩分摂取、喫煙、アルコール、体調変化他）などが挙げられる。

7) 日常的な身体活動（生活活動・運動）強化が心身の健康維持・増進の基盤となる

WHO は、全世界の死亡原因に対する危険因子

の1位を高血圧（13%）、2位：喫煙（9%）、3位：高血糖（6%）、4位：身体活動（生活活動・運動）不足（6%）としており²、青年層からの基盤づくりが大切である。トップの高血圧予防には、2位以下の因子が全て関連しており、特に、身体活動不足に対する対応が求められる。WHO は、その対策として「健康のための身体活動に関する国際勧告」を発表しており、その中で、各年齢群（5-17歳、18-64歳、65歳以上）に対する有酸素性身体活動の時間と強度に関する指針を提示している³。

日常的な身体運動は、気分転換やストレス解消になることから、メンタルヘルス上の一次予防としても有効である⁴。また、中等度～強度の有酸素運動が、上気道感染症、即ち風邪の罹患リスクを低減させると考えられている⁵。一方で身体運動の不足は肥満や生活習慣病の危険因子と成り得る⁶。寺山⁷は2011年3月に発生した東日本大震災後の住民定期検診で、40歳以上の岩手県内地域住民の60%は、収縮期（最高）血圧が発災直後から140mmHg以上と高めで、震災後の不安定な状況が、高血圧、脂質異常症、糖尿病などの生活習慣病に与えるインパクトは予想以上に強く、また長期に及ぶとしている。その原因として、塩分摂取量、過栄養や運動不足などを挙げており、将来、脳卒中の誘因と成り得ると考えられることから注意を喚起している。また治療面からも、糖尿病、高血圧症、脂質異常症に対する身体活動の効果は明確であり⁸、健康維持・増進の観点から日常の身体活動を強化する必要性がある。

5. 今後の展望

今回、参加協力して頂いた被験者のうち体育会系サークルに在籍し、3年以上の活動歴を有する「運動経験あり」の生徒は38%であった。従って、6割以上の生徒は「運動経験なし」という現状である。20～30代の成人で運動に積極的に取り組む人が30%前後であることを勘案すると、過去、サークル活動を経験したことの

ある方々が、その経験を活かして様々なスポーツに取り組んでいる姿が目に見え。しかし、あまり運動経験のない生徒たちは、招来、積極的に運動志向に成り得るだろうか？ 危惧されるところである。

わが国においては、超高齢化と少子化と医療の質的向上などの影響から、国民の医療・社会保障費は、国家予算を凌駕する状況で拡大し、毎年1兆円以上の積み増しを余儀なくされている。そのまま赤字国債を「増殖」させている現状を打破するためには、生活習慣病の予防に注力する必要がある。しかし、実質上、40歳未満は域外にある状態で、出来上がってしまったものを復元するのは手間暇のかかる作業で、効率も頗る悪い。

因みに、本研究の対象となった被験者の約1割が安静時高血圧（Ⅰ度＝軽度：3名、Ⅱ度＝中等度：1名）で、1名は「運動経験あり」であったが、「軽運動後」に最高血圧が200mmHg近くに上昇し、中等度運動へ誘導できなかった経緯もある。従って、若いうちから生活習慣病予防に重点を置き、「体を動かせば心も動く」ことを含め、青少年における心身の安定化を図ることに繋げられよう。以上の観点から、中学・高校における身体活動、すなわちスポーツに対する取り組みに官民あげてもっと注力すべきであると考え。

【 参考文献 】

1. 厚生労働省：標準的な健診・保健指導の在り方に関する検討会 第4回資料：健康づくりのための運動指針。身体活動・運動の単位 2006.

<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/11/s1109-5g.html>.

2. Global health risks: mortality and burden of disease attributable to selected major risks. Geneva, World Health Organization, 2009.

3. Global recommendations on physical activity for health. Geneva, World Health Organization, 2010.

4. Rosenbaum S and Sherrington C. Is exercise effective in promoting mental well-being in older age? A systematic review. Br J Sports Med. 2011 45: 1079-80.

5. Martin SA, Pence BD, et al. Exercise and respiratory tract viral infections. Exerc Sports Sci Rev. 2009 37: 157-64.

6. Haskell WL, Lee IM et al. Physical activity and public health: updated recommendation for adults from the American College of sports Medicine and the American Heart Association. Circulation. 2007 116: 1081-93.

7. 寺山 靖夫. 東日本大震災 生活習慣病へのインパクト. 成人病と生活習慣病. 42 巻: 588-92

8. 厚生労働省：標準的な健診・保健指導の在り方に関する検討会 第5回資料：運動・身体活動を指導する際のリスクマネジメント 2007. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/02/s0219-4c.html>.

漢字をどう取り扱うか

——固有名詞の中国語翻訳をきっかけに

神戸夙川学院大学講師、劉争

【目次】

1. はじめに
2. 漢字の音、形、意、
3. 言語の記号
4. 調和の翻訳
5. 結論

1. はじめに

近年、観光立国のスローガンを掲げる日本を多くの中国人観光客が訪れている。日本のインバウンド観光は観光産業の柱として、外国人観光客の日本ブームを呼んでいる。クールジャパンへの関心がもはや止まらない歯車のように、外国人観光客が日本を訪れ、日本国内の消費にも大きく寄与している。インバウンド外国人観光客の中でも中国籍の観光客は、他に譲らない勢いで増加し、断然トップの地位を占めている。今後も日中間観光交流がさらに拡大することが予想される。

中国人観光客にとって日本を理想的な旅先として選定した理由は様々だが、「日本製の商品を買いたい」「日本料理が好き」「安全安心」「バリアフリーの環境でシニアや子供連れに便利」「サービスがよい」「円安」「近い」がよくあげられる。

これらに加えて、「漢字が読めるからほかの国より分かりやすい」と挙げる人も少なからずいる。これは町の看板、お店のメニュー、電車や地下鉄の駅名、住所、人の名前など漢字で書かれているものが中国人観光客から見て「何となく分かる」、「覚えられる」安心感が湧くためだと考えられる。つまり、日本語の言葉（発音）が耳で全然分からなくても、簡体字を用いる中国人観光客にとっても、

日本語の漢字の「形」を目で見れば自ら認識できるという目に映る字の類似した漢字の「形」に対する親近感である。このように、文化交流における漢字が果たす役割は大きいことを改めて認識させられる。

JNTO¹によると、インバウンド中国人観光客を誘致する主要ターゲットは三十～四十代の中堅層の世代である。日本の最新のサブカルチャーに引かれる若者は世界中にいるのは言うまでもないが、中国人観光客の多くは1960年代、70年代生まれの世代で、彼らは、日中国交正常化された1972年以降の両国の文化ハネムーンを少年少女時代に経験しているのである。80年代～90年代の中国は日本のドラマ、アニメを大量に輸入した時期である。テレビ視聴率のゴールデンタイムに『鉄腕アトム』、『一休』、『ドラえもん』、『聖闘士星矢』、『花の子ルンルン』などの代表的な日本アニメが毎日のように下校後の中国の多くの子供達を楽しませたのである。大人に成長した彼らの一部は、日本を訪れる観光客となったのである。

しかし、彼らを最近少し戸惑わせるようなことが起きている。一つの例を挙げれば『ドラえもん』である。彼らが子供の頃に見た日本アニメ「ドラえもん」の中国語訳は「機器猫²(gi qi mao³)」であったが、今は「哆啦A梦(duo la ei meng)」と呼ぶようになった。「機器猫」は中国語で「ロボットの

¹ 国土交通省観光庁 JNTO ホームページ掲載内容 http://www.jnto.go.jp/jpn/services/avrsih000000qyhl-att/pp_china.pdf (2015年2月20日0:00時点)

² 比較上の便宜で中国語の簡体字を繁体字体で表記する。以下同様。

³ 中国語ピンイン表記は四声の表記を省くものとする。以下同様。

猫」の意味である。ドラえもんは未来の耳なし猫というキャラクターの設定から訳した固有名詞である。一方で、「哆啦 A 夢」は音を表記する漢字のみで、意味を持たない。強いて言えば「なんとか A の夢」という意味になる。もしかしてなんとか B 夢と C 夢もあるのかなと苦笑いしながら憶測してしまう。

このような外国語の固有名詞を中国語に翻訳する際の漢字表記の変更は、日本のアニメの事例以外でも、数年前から韓国政府が首都ソウルの中国訳を「漢城 (han cheng)」から「首兒(shou er)」に変更した事例も挙げられる。これも韓国の漢字をそのまま使用するのではなく、韓国語の発音を反映した漢字表記の翻訳例である。つまり中国では外国語の固有名詞の翻訳ポリシーの変換が見られる事例が少なからず生じている。

一方、日本でも近年、片仮名のメニューを置くレストランやカフェ、店、ブランドが増えてきている。片仮名のメニューは日本語だが、「翻訳」している場合もある。例えば「Salmon marine」を「サーモンマリネ」と発音して注文できたとしても、料理が運ばれてくるまでは謎のままである。その場合は言葉のわからない客は勇気を持って店員に尋ねるか、面子を守るために黙ってリスクを取るかの選択肢のどちらかしかない。特に後者の場合は、日本語を母国語とする話者にとってある種の異文化体験とも言える。お店の立場にしてみればむしろ異文化体験をお店の世界観の一部としてお客様に提供することができる。従って、「Pizzeria」は「Pizzeria」のままで、或は「ピッツァ」であって、「具たくさん焼きパン」のような「翻訳」は不要なのである。

これは何を意味する現象なのだろうか。人々は言葉の壁を超えて何を伝えたいのだろうか。もしかして中国語翻訳もこのような手法に切り替えられるのだろうか。

このような一連の現象の背後で他国の社会的、政治的意図がどのように働いたのかは今回の小論

の対象とせず、固有名詞をめぐる翻訳ポリシーの転換をきっかけに翻訳の視点から考察することとしたい。

2. 漢字の音、形、意

漢字は中国語の文字として中国で発明された表意文字として一般的に知られている。中国漢代の許慎が『説文解字』に漢字について「先有文而後有字、六書象形指事多為文、会意諧声多為字、転注仮借文字兼之」と分類した⁴。これは「先に文があつて、後に字がある。六書という分類のうちに、象形と指事の多くは文に入る。会意と諧声の多くは字に入る。転注と仮借は文と字の両方を兼ねている。」と理解できる。つまり漢字の構成法、使用方法の分類を示したものである。では、六書について、それぞれ見てみよう。

1. 象形：実物の形・属性をかたどり、ある程度抽象化して表した漢字。「日」「月」「木」「人」など。

2. 指事：数や位置など、形を模写できない抽象的概念を表すために考案された漢字。「一」「二」「上」「下」など。

3. 会意：二つ以上の漢字を組み合わせ、両者を合わせたものに近い意味と字形をもつ一字の漢字を作る構造法。「林」「轟」「娶」など。

4. 形声：その語の意味の範疇を表す文字（義符、意符）に、その語と同音・類音の文字（声符、音符）を付してつくった合成字。諧声ともいう。「河」など。漢字構成法のうち最も多く見られるものである。

5. 転注：運用法の一つで、古来諸説があつたが、ある意義を持つ漢字を、その音とは無関係に、それと近い、あるいは転移した意義の語を表すために用いることをさすと見られる。「音楽」の意を表す語に「樂」を、意味上関連のある「楽しむ」の意を表す語にも用いるのがその例。(中略)これ

⁴ (漢) 許慎 選 『説文解字』江蘇古籍出版社 2001 年 12 月出版

は同時異義の状態を生み出し、文字の機能から反することから、会意や形声に取って代わられ次第に少なくなっていく。

6. 仮借：既成の漢字を借りて、それと同音ないし類音でしかも意味の異なる別の語に転用する用法。本来「皮革」の意味を表す漢字の「革」を、同音カクを持つ別の意味の単語「改める」に転用して後者にも「革」の字をあてたり（中略）などがその例。⁵

漢字は日本列島に伝来されて以来、古代日本の口承文化を記録するツールとして古代日本人に重宝されてきた。伝来当初は唯一の文字として漢字による言語活動が日本で行われ、以来国語表記の文字としても語彙の面でも国語の上に多大の影響を及ぼした。さらに時代の変遷に伴い、万葉仮名の簡略化により日本独自の表音文字である平仮名、片仮名を生むに至る。漢字も訓読み、音読みを付与されながら日本で作られる国字と共に日本語として定着し、今は欠かせない日本の言語の一部となっている。現代社会においても漢字は中国人の言語記号としてだけではなく、漢字文化圏と呼ばれる日本、韓国、シンガポールなどの国を含むアジアないし世界のツールとして日々のコミュニケーション活動に役割を果たし続けている。

漢字は「音」「形」「意」という三つの要素があると知られている。日本語と中国語の翻訳はお互いの言語に繁体字と簡体字の区別があるものの、「形が同じとみなす漢字」が多く存在している。それによって日中間の翻訳はほかの言語間では遭遇しないような翻訳問題を抱えている。それは同じ「形」であっても、それぞれ日本語と中国語という異なる言語構造を背景とした漢字の意味の相違から生じる問題と言えよう。

日中の漢字語彙は「同形同義」、「同形異義」、「異形同義」、「異形異義」という四つのタイプ⁶に分け

られると言われるが、翻訳において問題が生じやすいのは「同形」漢字による「異義」のタイプである。

しかし、「ドラえもん」は日本語には漢字という「形」を持たない名詞なのである。この場合は発音で漢字を当てることが多いが、「ドラえもん」という日本語をソース言語とする名詞に対して、中国語をターゲット言語とする漢字に変換する際に二つの方法が選択できる。一つは「哆啦A梦」という音の翻訳であり、もう一つは「機器猫」という意味の翻訳である。どれもドラえもんの翻訳として成り立つが、どちらの手法が妥当と考えられるだろうか。

実際に問題となるのは「ドラえもん」の翻訳に限らず、日本語の固有名詞に触れる機会が増えていく中で、翻訳者にとって「便利」と同時に「邪魔」である漢字を処理する際に、どんな翻訳原則を採用するのかということである。

聞き手の人にとって最大多数の人にとって最も理解しやすい手法であるが、その理解したことを持って自分と異なる言語を話す人と交流しようとなると、越えられない壁がある。お互いに意味を理解していても通訳なしでは言葉の壁を越えられない。この不便さは言語外部の人間と交流するニーズのある一部の人のみ感じるものである。グローバルコミュニケーションの進化に伴い、このようなニーズが増えていくであろう。

言い換えれば、中国語への翻訳（いわゆる漢字記号への変換）が直面しているのは以下のような問題が考えられる。

A 発音（音韻）重視の翻訳方法：交流しやすいが、理解しにくい。

同じ又は似た音の発音をすることによって、お互いの言語が話せない人同士でも固有名詞だけで、ある程度の交流が可能になる。しかし、その人がその発音を記憶するのにエネルギーが必要で、その発音の意味を記憶する能力次第で格差が生じ、応用できない人が多い。

⁵ ブリタニカ百科事典該当項目

⁶ 王承伝 (1998) 「同形異義語における中国語と日本語の対照研究」『人文科学教育研究』25、P. 15-28

B 意味（概念）重視の翻訳方法：理解しやすいが、発音での交流ができない。

発音（音韻）重視の場合、意味を実際翻訳していない状態であり、ただ表記記号を変換しただけである。一方で意識した名詞が定着した場合は、お互いの言語が話せない中国人と日本人が仮に同じドラえもんについて語っていても全く意思疎通できない弊害がある。当然、ペンと紙が手元にあるアニメのキャラクターがすぐに描ける才能の持ち主なら別だが、そうでなければ二人の脳裏に同じ「ドラえもん」のあの青い姿を思い浮かべていても、お互いにまったく関連性のない発音をしてから苦笑いをしながら沈黙を耐え抜くしかないだろう。

中国語母国語話者の漢字理解と心内辞書に関する実験と研究がすでに行われているが、語彙判断の漢字視覚提示について「意味の似ているものと形態が同じものが速く判断された。音韻の主効果は見られなかった。」。そして命名課題の実験について「音韻の似ているものと意味の同じものが速く読まれた。形態は同じものが速く読まれる傾向が見られた。」⁷

つまり、漢字の「形」「意味」は「音」より重要であることを示唆している。

3. 言語の記号

ウィトゲンシュタインは人間のことばを「言語ゲーム」と呼び、言語への懐疑を呼び起こした。『青色本』の中で初めて「言語ゲーム」という言葉を紹介する際にウィトゲンシュタインはこう言った。

「今後たびたび言語ゲームと呼ぶものにあなた方の注意を引くことになるだろう。それは、高度に複雑化した日常言語の諸記号をわれわれが使う際の使い方よりも、ずっと簡単な記号の使い方である。言語ゲームとは、子供が語を使用し始める際にとる言語形態のことである。言語ゲームの研究

は、言語の原初的な形態の、すなわち原初的言語の研究である。」⁸

しかし、その後『哲学探究』（七節）では更に「私はまた、言語とそれが織り込まれる諸活動の総体も『言語ゲーム』と名付ける」と言った。『哲学探究』は子供が「赤いリンゴ五個（Five red apples）」と書かれた紙片をもって果物屋に買い物に行く話から始めている。果物屋は、「りんご」と書いてある箱の中から赤いのを五つ取り出し、代金と引き換えにそれをその子に渡す。子供も果物屋も、一言も言葉を発しないかもしれない。だが、すべては円滑に、何の問題もなく進行する。⁹

つまり、コミュニケーションの目的がりんごを買うことならば、沈黙した記号でその目的を果たすことができるのだ。しかし、現実世界では我々の生きる現代社会は沈黙コミュニケーションと発音コミュニケーションを併用しているのである。インターネットの発展に伴う情報社会では多くの沈黙コミュニケーションを経験している一方で、観光産業は視覚化できる沈黙ツールだけでは考えられない。記号は言語の「形」の一部分だけである。

ウィトゲンシュタインに継ぐ認識論批判学者のソシュールも「言語は世界の客観を認識するための道具ではない」と断言した。彼らの断言には賛同すると同時に、言語は、「認識するため」だけではなく、「伝達するため」のコミュニケーションツールであることを強調したい。そしてその伝達するための道具の対象はあくまでも「認識」にはかならないはずである。つまり、言語の「音」は人間同士の対面コミュニケーションの表現伝達ツールでもある。

ここで注目したいのは中国人と日本人の間に共

⁸ 『ウィトゲンシュタイン全集』大修館書店 1976年1月

⁹ 永井均『ウィトゲンシュタイン入門』ちくま新書 1995年1月20日

⁷ 茅本（2002）『教育心理学研究』P.436

通する漢字という「形」の存在である。漢字は「音」「意」「形」という三つの要素を持つ象形文字である。その中でも「形」が最も重要な要素である。エジプトの文字ヒエログリフと同じく、「絵」の性質を持つ符号である。漢字の「意味」はその「形」と一対一の直結関係があり、「音」よりも「形」と「意」の両者の関係に重心がある。

実際、今の中国は 56 の民族が 960 万平方キロメートルの広大な国土で共生し、上海語、広東語をはじめ、多くのバリエーションの発音（方言）を交差しながらコミュニケーションを図っているが、それらを書き出すと同じ漢字に反映されるのである。そうでなければ漢字の数量を何十倍、何百倍も増やさないと足りないであろう。しかし、一つの漢字は多くの経験と物語を語ることができる。また漢字と漢字の組み合わせによって無数の表現の可能性とバリエーションで人の繊細的で精緻な表現を伝えることができるツールなのである。

また、国連の各国の言語で書かれる文書の中で中国語のドキュメントが最も薄いことを噂するように、漢字は一文字を単位とするが、その一文字に含まれる複雑な意味合いを持つことによって、最も少ない字数で複雑な内容を表現するのに得意な表記ツールでもある。これは漢字の前身が「絵」であるということからそう理解しにくいことではないはずだ。

だからこそ漢字は中国人にとって絶対不可欠なコミュニケーションツールであると同時に、文学的な精神的享樂に最適なツールとして数千年受け継がれ愛されてきた記号である。

日本の現代社会では外国に属するものを完全且つ忠実に表現するために、外国語の言葉に代表されるモノの雰囲気や損なわずに描くために、「意味」を「翻訳」しないで発音のみ翻訳（表記）している。

しかし中国語翻訳の場合、同じような手法は、日中間の漢字の二重身分によって混乱を及ぼし、誤解や違和感が生じやすいと考えられる。つまり、

日中間の翻訳にはほかの言語間の場合と明らかに通じない事情がある。これは正に柳父章氏の指摘された通りである。

「英語、フランス語などの西洋語の文字は、表音文字と言われ、話し言葉が基本で、「形」とはまず言葉の音であり、文字は音の写しなのである。だから、言語の音の「形」、文字の「形」は、その「意味」と密接に結びついている。これに対して、中国、日本などの漢字は表意文字と言われ、文字の「形」が重視されている。古来、中国の文字学では、「形、音、義」と言葉を三つの要素で考える伝統がある。文字の「形」は、音の写しではなく、文字の「形」が音や義とは独立して重視されている。」¹⁰

中国語において言語の三つの要素である「音」、「形」、「意」の三つは並列関係ではなく、「音」対「形+意」の関係である。

ミシェル・フーコーは記号についてこのように指摘する。「ソフィストたちの活動と交換とがしりぞけられて以来というもの、人々が多かれ少なかれ確信をもってかれらの逆説を封じて以来というもの、西洋思想は、言説が思考と言葉（パロール）との間にどんな小さな場所でもつくるのを警戒してきたようであり、言語表現がただ考えることと話すこととの間に或る場所として現れることを、警戒してきたようであります。それは、表徴（シーニュ）を身につけ、言葉によって可視的なものとなった思想、或は逆に、それは、活動し、意味の効果を生み出している言語体系の構造そのものでありましょう。（中略）言説（ディスコース）は、第一の場合には記述の、第二の場合には読解の、第三の場合には交換の、働き以上のなにものでもありません。そして、これらの交換、読解、記述は、絶対に記号以外のものを働かすことはない。こうして言説は、その実在性においては、自らを

¹⁰ 柳父章 水野的 長沼美香子編『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』 法制大学出版局 2010 年 9 月 10 日

記号表現（ニシフィアン）の秩序に置くことによって、無にひとしくなるわけであります。」¹¹

これに対して、中村雄二郎¹²はこう述べた。「言説＝言語表現の実在性をとり去るもう一つのものとして、「普遍的媒介」という主題がある。（中略）実はこのロゴスは、事実上すでに手入れのされた言説にすぎない。あるいはむしろ知らぬ間に言説化する事物であり、出来事である。すべてが言説の形式をとりうる時、その理由は、すべての事物がその意味を表し交換しつつ、自己意識の静かな内面に這入りうるからである。つまり、フーコーによれば、言説＝言語表現は、創設的主体の哲学のうちにあつては「記述」の、始源的経験の哲学にあつては「読解」の、普遍的媒介の哲学にあつては「交換」の、働き以上のなにものでもなく、そこで働かされているのは、ただ「記号」だけである。」

ここでいう言説は言語の意味ではなく学問や理論の意味だが、言語の場合でも通用するものがある。「記述」は「形」とし、「読解」を「音」とし、「交換」を「意味の理解」として考えた言語の場合も、コミュニケーションとは人々が言語というツールを介した「各自の経験の交換」と理解することができる。つまり、言葉の「意」の部分というのは自分自身が他人と交換可能な「経験」なのである。

中国語翻訳の場合に則して考えれば、音韻重視の翻訳も必要かもしれないが、翻訳の目的が人々の経験を交換可能にし、意味の理解を可能にすることであることは本質と理解すべきである。

4. 調和の翻訳

直訳か超訳か、忠実か自由かの翻訳論は古今東

西を問わず多くの知識人に議論されてきた。一般解釈学の始祖と教育者のフリードリヒ・シュライアーマハー（1768～1834）が古代ギリシアの哲学者に関する第一回講義（1811）から数えて三回目のアカデミー講義の原稿一部を引用したい。

「本来の翻訳者は、まったくかけ離れた人格である著者と自分の読者というふたりの人間を実際に出会わせ、ことに後者を母国語の圏内から無理に引き出さずにしかもできる限り完全に前者を理解、享受させようとしします。そのために翻訳者が辿る道はどういったものでしょうか。私が見たところでは道は二つしかありません。著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす、このどちらしかありません。二つの道はまったく異なるのですから、どちらか一方を徹底して厳密に追及する他なく、折衷してみたところで精々信頼に値しない代物しか生み出せないことはわかりきっています。著者と読者とが完全にすれ違ってしまわないようにすること、これが肝心なのです。」¹³

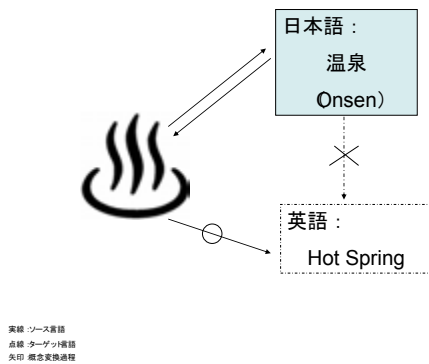
中国語翻訳の「落とし穴」の構造を言語学者オグデンと文芸批評家リチャーズが 1923 年に著した『意味の意味』に「意味の三角形」と称する三角形¹⁴で例示することができる。

¹¹ ミシェル・フーコー『言語表現の秩序』現代思想選 河出書房新社 1981年8月28日 51頁

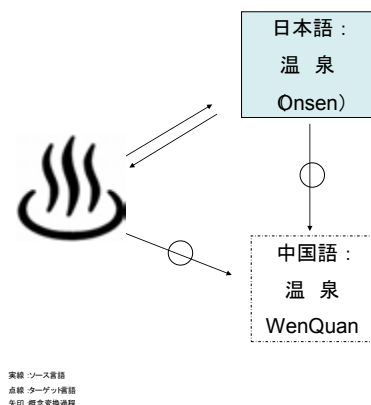
¹² 中村雄二郎（昭和47年2月）「言語表現とはなにか」『言語表現の秩序』現代思想選 河出書房新社 1981年8月28日 136頁

¹³ 三ッ木道夫編訳『思想としての翻訳——ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社 2008年12月30日

¹⁴ オグデン（著）リチャーズ（著）石橋 幸太郎（翻訳）『意味の意味』叢書名著の復興5 ペリかん社 1967年



例えば「温泉」という名詞の日本語を英語に翻訳する場合は上の図が示す通り、翻訳者が日本語漢字の言語記号からその記号が代表する概念（意味）を頭の中で変換するプロセスを経て英語の言語記号に書き換えるのである。



一方「温泉」という名詞の日本語を中国語に翻訳する場合は上の図が示す通り、翻訳者が日本語漢字の言語記号からその記号が代表する概念（意味）を頭の中で変換するプロセスを経て中国語の言語記号に書き換える方法と、記号を変換せずにそのまま概念を獲得する二つのアプローチが可能である。漢字経由のそのままのルートには「落とし穴」が存在するのである。

合わせて日本の固有名詞の中国語翻訳の既存例を挙げてみる。

(一) 漢字または意味を含む固有名詞の場合：

1) 社名、官庁名、部署名

①「特許庁」の中国語訳：

「形」重視 ➡ 「特許庁」

ここで一般翻訳では意味のズレ（日本語の「特許」は「専利」と「実用新型」を含む意味）が存在するが、固有名詞の場合はそのズレを軽視する。

②「経理部」の中国語訳：

「形」重視 ➡ 「経理部」

ここで一般翻訳では意味のズレ（日本語の「経理」は中国語で言う「会計」の意味で、一方で中国語の「経理」は管理職という意味）が存在するが、固有名詞の場合はそのズレを軽視する。

2) 人名

①安倍 (A Be) 首相の中国語訳：

「形」重視 ➡ 安倍 (発音: An Bei)

「音」重視 ➡ 阿背 ×¹⁵

②鳩山 (HaToYaMa) 前首相の中国語訳：

「形」重視 ➡ 鳩山 (発音: Jiu Shan)

「音」重視 ➡ 哈托亚玛 ×

③初音ミクの中国語訳：

「意」重視 ➡ 初音未来 (発音: ChuYinWeiLai)

「音」重視 ➡ 哈兹奈咪库 ×

(二) 漢字を含まない固有名詞の場合

1) 人名

①有名歌手の宇多田ヒカルの中国語訳：

「意」重視 ➡ 宇多田光 (発音: YuDuoTianGuang)

「音」重視 ➡ 宇多田嘿咩利 ×

②有名歌手の青山テルマの中国語訳：

「意」重視 ➡ ×

¹⁵ ×マークは該当翻訳が存在しないことを意味する。以下同じ。

「形」及び「音」重視→青山黛瑪（発音：QingShanDaiMa）

2) 商品名

①ポッキーの中国語訳：

「意」重視→×

「音」重視→百奇（発音：BaiQi）

3) キャラクター名

①アンパンマンの中国語訳：

「意」重視→面包超人（発音：Mian Bao Chao Ren）

「音」重視→阿帕曼 ×

以上の例を通して、音韻重視、形態重視及び両者混合の翻訳傾向が見られるが、漢字という「形」を含む名詞にしても、含まない片仮名、平仮名の名詞或は名詞の一部にしても、やはり「意味」を持つ或はその「意味」を漢字という「形」に還元可能であることを前提に漢字の還元を優先させる傾向である。「形」と「意味」の間では「形」を最優先することもわかる。「特許庁」のように、意味の「落とし穴」があっても構わないのである。そして「意味」または漢字の「形」を持たない場合のみ、音韻のみで発音の近い漢字で翻訳するのである。

一方で音韻重視の場合でも漢字の「意味」を生かした翻訳例もある。例えば、固有名詞の「ヨドバシカメラ」（日本の大型電気販売店）の場合、日本語では「淀橋」という地名の片仮名表記をしているが、中国語訳は漢字の「淀橋」ではなく、「友都八喜」なのである。発音も類似の上に、中国語としての意味も「友達の町で多くの喜び」で理解しやすいだけでなく、心地のよい固有名詞として記憶しやすいのである。このネーミングは音と漢字の形＝意味を吟味した訳と言える。観光客にとって好感度の高い名前、記憶できる名前はより多くの人に口コミを広げることができ、店舗側に

にとって好ましい効果をもたらす。

コカ・コーラ社の中国語訳も有名な例である。世界中で愛される飲料のコカ・コーラは中国では「可口可乐（KeKouKeLe）」と訳される。発音も類似だが、意味も「美味しい、楽しい」とコカ・コーラのブランドイメージを完璧に融合した訳と言えよう。

そこで、漢字という形がそれぞれ中国と日本における「音」と「意」の役割を包括的に反映できる翻訳方法が最も望ましいと考えられる。「音」に加えて「意」を重視した翻訳方法は、聞き手に対する教育的な機能も果たせると思われる。「音」、「形」、「意」のそれぞれを重視した多様的で柔軟的で翻訳方法は、「中庸的な翻訳」とも呼べるかもしれない。中庸は『論語』で知られる孔子の「中庸の徳たるや至れるかな」¹⁶とたたえているものである。中庸を人間の行為の上での徳としている。孔子後学になって、「極点に走らず、時に応じた適切な方法をとるとする意と、庸の持つ常という意味を取り出し結合させ、中庸をば中より一步すすめた日常の実践道德の徳目として確立させたのである。」¹⁷

しかし、「中庸」は現代中国人の中ではマイナスの意味がある。いわゆる個性がなく、主張が曖昧な意味合いを持つ。このような理解の根源は中国の過去にあった儒教打倒の教育と深く関係している。マイナスイメージにも関わらず、中庸は今でも有効な問題解決手段として世界及び中国国内で注目されている。中庸は折合う意味合いが強いが、双方が折合うことによって調和的な状態を保つことが可能になる。

以上の考察を経て中国語翻訳は漢字の3つの要素に合わせた3つの翻訳方法が考えられる。

方法1、記号（漢字）を重視→共通或は類似の漢字を優先する

¹⁶ 『岩波哲学・思想辞典』岩波書店 1998年3月18日

¹⁷ 同注16

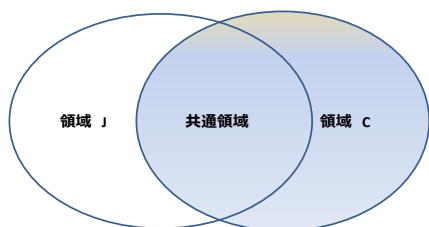
方法2、概念（意味）を重視→概念、経験の交換を優先する

方法3、発音（音韻）を重視→共通或は類似の発音の漢字を優先する

ソース言語の日本語名詞の場合、漢字を介した概念の伝達をするには三つの翻訳方法をどう使い分ければ妥当なのかは問題になる。

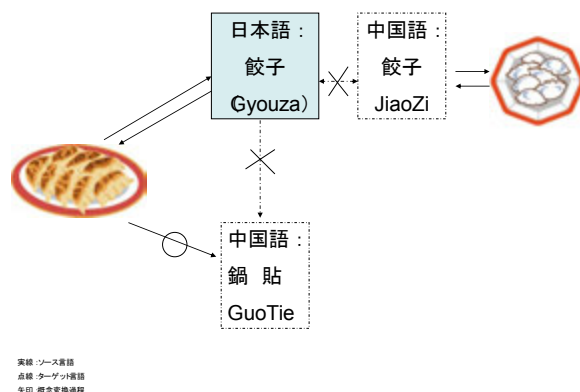
日本と中国の記号である漢字が下の図のように、中国語における領域Cと日本語における領域Jがある。

漢字が日本と中国における概念の領域



CとJという二つの領域において同じ概念である場合は共通領域の範疇になる。この場合は漢字を優先した記号そのままの方法1の翻訳が最も伝わる翻訳で望ましいであろう。先述の「温泉」はその例である。

一方、領域Cと領域Jにおける概念をカバーできない部分に関しては、方法2又は方法3が妥当であろう。例えば、日本語にも中国語にもある名詞「餃子」の漢字は共通しているのに対し、日本語における概念と中国語における概念は共通しているわけではないのである。そのため、「餃子」をそのまま翻訳すると、中国人にとって「水餃子」ではなく「焼き餃子」なのだという「裏切り」をしてしまう恐れがある。くれぐれも漢字を見てそのまま直訳せずに忠実に翻訳し、その概念をそれぞれの言語領域に還元したいものである。



ソース言語とターゲット言語の記号の特徴を分析し、翻訳を工夫することによって、読み手の翻訳情報の理解度を高め、情報の格差を縮ませる効果があると考えられる。

翻訳に限らず、通訳の場合でも翻訳方法を積極的に工夫することで、日中間の異なる目的のために存在する漢字がもたらした違和感の解消、互いの文化理解の深化と受容に繋がることであろう。

複数の翻訳方法を駆使した翻訳、漢字という記号を生かした翻訳こそ調和の翻訳なのである。

5. 結論

日中両国はともに漢字を持つ文化的親近感と歴史的・政治的嫌悪感が共存する隣国である。同じ表記ツールの漢字を持つにも関わらず、漢字の意味機能を軽視したドラえもん「哆啦A梦」のような表音翻訳が増えていく社会情勢の流れの中で漢字は戸惑いながらも存在している。そのような音重視の翻訳効果はどう評価していくのか。筆者は、個人の学習能力、特に語学能力の格差によって情報伝達に負の影響を与えるのではないかと考える。また中国語を母国語とする者の立場から漢字記号を最大限に利用しつつ、誤解を最小限にする多様的で柔軟的な「調和の翻訳」の方法と意義を提示したいと考える。余計だが、「ドラえもん」の中国語訳を調和の翻訳方法で訳すとすれば、私は恐らく「哆啦卫门猫」（ドラ衛門ネコ）と訳したくなるだろう。「ドラ」の部分は音訳し、「えもん」は漢

字を復活させ、「猫」という具象を付け足すことで日本の人気キャラクタードラえもんを立体的に表現することによって理解しやすく、記憶しやすい翻訳になる。

しかしながら、現実には、既存の音訳重視の名詞がすでに定められた場面によく遭遇する。その場合は「調和の翻訳」をする精神を持ってせめて翻訳（表記）をしてあげたい。要するに、中国語への翻訳は音と意味を同時に提示する「哆啦 A 梦（機器猫）」のような翻訳の仕方が「音」「形」「意」を求める聞き手にとって満足できる方法ではないかと考える。すべての言語要素を提供することによって、コミュニケーションのための言語の教育的機能も果たせ、情報の格差を縮小する効果も齎すものだと考える。当然すべての翻訳ではなく、日本語の固有名詞に限定した活用が現実的である。聞き手にとっての分かりやすい翻訳は観光客にとっても大きなホスピタリティを感じることになるのかもしれない。世の中には完璧な翻訳が存在しないし、翻訳への評価も人それぞれである。だからこそ翻訳の方法、原則、思想はいつまでも人々に考えさせられる問題であり、常に我々人間社会と人間感情に影響を与える重要な現実問題である。

あとがき

今回の執筆は神戸夙川学院大学が神戸山手大学へ移転に伴う書籍移転と引越し梱包作業の最中にあたり、多くの先行研究文献と例証を省き、十分な分析が行えない遺憾を抱いている。論点も不十分な点が残っている。漢字の記号論的な視点から分析することを今後の研究課題としたい。

新しい学科への転籍をきっかけに今後は新しい研究と教育活動に勇気と根性を持って臨んでいきたい所以である。

La relation entre la 《 force majeure 》 et l' 《 équilibre des forces 》 chez Proudhon.

Professeur adjoint à la faculté de tourisme de l'Université Kobe Shukugawa Gakuin
Munehika ITABA

【目次】 (Table des matières)

0. 要旨 (Résumé en japonais.)
1. Autour de la notion d'《 équilibre 》.
2. Immanentisme de Proudhon.
3. Travail, plus que la « force collective ».
4. Direction de la « Révolution perpétuelle ».
5. Conclusion: Deux proudhonisme différentes?

0. 要旨 (Résumé en japonais.)

本論（プルードンにおける「不可抗力」と「諸力の均衡」の関係）は、19世紀フランスの社会哲学者プルードン（1809-1865）の後期思想における最重要概念の一つ、「諸力の均衡（l'équilibre des forces）」の内実と意義を探るものである。

この概念については、スターリン批判後の1960年代に始まる「第二次プルードン・ルネサンス」の先駆にして泰斗、ジョルジュ・ギユルヴィッチが、哲学的には、概ね否定的な捉え方をしたことが知られている。すなわち、「現実主義的プラグマティズム」を志向する後期プルードンにおいて、安定的な「均衡」というモチーフは、合理主義の残滓でしかないという捉え方である。

他方、近年の「第三次プルードン・ルネサンス」の中でも、とりわけ重要な、エドゥアール・ジュールダンの『プルードン、神と戦争』（2006）は、「諸力の均衡」の概念を、超越項を拒否して成り立つプルードンの内在主義を決定づけるものと捉える。「均衡」は、現実に対し、「上から」押しつけられるようなものではなく、諸力の対立そのものから生まれる。それゆえ、それは、合理主義の残滓どころか、内在主義の貫徹のための概念と見

なされる。

本論は、基本的に、後者の立場に同調するが、同時に、それが抱える根本的な困難を指摘し、その解消を目指す。問題は、「諸力の均衡」が前提とする「対立」の概念である。ジュールダンは、『戦争と平和』における「力の権利」の議論を「プルードンのポレモス」と呼び、その意義を最大限に認めている。だが、超越的な神の正義を排除することでのみ成り立つ内在的な正義は、最も根本的な「対立」、すなわち人間と神の対立を特権化することでのみ可能なのではないか。本論は、この困難の位置づけを明確にし、それを解消するための方途をも示す。構成は、以下の通りである。

まず、1（「均衡」の概念をめぐる）において、上記で示した「諸力の均衡」をめぐる研究史上の対立を繙き、本論の研究史上の位置づけを明確にした。次に、2（プルードンの内在主義）において、ジュールダンの上記立場を整理し、その重要性を明らかにした。そして、3（労働、集合の力以上のもの）、4（「永遠革命」の方向性）において、ジュールダンの立場の陥る困難の理由をプルードン前期／後期のテキストにあたりながら明らかにした。その中で、特に、前期思想で「労働」を指して用いられる「不可抗力（la force majeure）」の役割の重要性に注意を促した。それらを踏まえ、5（2つの異なるプルードン主義？）において、前期／後期で、若干の立場変更が行なわれている点を見逃すことができないこと、しかし、いずれも社会契約論への根本的批判という1つの立場として理解できることを示し、結論とした。

1. Autour de la notion d' « équilibre ».

Il y a une cinquantaine d'années, après le « discours secret » par Khrouchtchev, la philosophie sociale de Pierre-Joseph Proudhon (1809-1865) a particulièrement été étudiée¹, en la considérant comme une condamnation du bureaucratisme et du totalitarisme. Ce courant s'appelait la « deuxième renaissance de Proudhon »². Ainsi, maintenant, nous sommes dans la « troisième renaissance », qui a pour but principalement de relativiser la dominance de la mondialisation néolibérale.

Georges Gurvitch, qui a préparé la « deuxième renaissance » et dont il est le personnage principal, a affirmé justement que notre auteur avait pressenti la « menace d'un fascisme dirigiste » dans le Second Empire³. Dans les années 1960, on a souvent considéré le proudhonisme comme une pensée de l'« autogestion »⁴ dont la source est aussi à Gurvitch. Il écrit: « La dialectique inhérente au travail devient tragique lorsque « l'organisation du travail » est imposée d'en haut aux travailleurs, [...] La dialectique propre au travail ne peut être entièrement supprimée, mais la révolution sociale peut enlever à celui-ci ce qu'il pourrait avoir d'accablant, en instituant l'autogestion ouvrière, fondement de la démocratie industrielle dans un collectivisme décentralisé. »⁵

Ainsi souligne le sociologue la dialectique du travail, il constate que celui est actuellement aliéné et doit être désaliéné dans l'avenir⁶. Comme l'a justement remarqué Gurvitch, la société est comparée à Prométhée chez Proudhon. Il est connu que celui-ci propose: « Appelons [...] la société Prométhée » (SCE I108). Si le travail était graduellement

désaliéné par la révolution sociale, la société se produirait elle-même par ce travail. C'est en ce sens que Gurvitch peut utiliser le mot « autogestion » qui serait instituée. On doit noter qu'il écrit aussi que la dialectique de travail « ne peut être entièrement supprimée ». Le travail ne pourrait pas être complètement libre, comme nous en verrons plus tard dans le paragraphe 5. C'est la différence entre Gurvitch et ceux qui ont considéré Proudhon comme un penseur prônant la notion de « spontanéité ». Le type de ceux-ci dans la « deuxième renaissance » est Pierre Ansart, lorsqu'il écrit : « Le passage révolutionnaire [...] à l'anarchie raisonnée ne marque pas l'avènement à une société sans précédent historique, mais l'avènement à une société délivrée et enfin rendue à elle-même »⁷ et « c'est cette spontanéité du social que l'anarchie libère en supprimant les aliénations politiques et intellectuelles du passé. »⁸

Gurvitch aurait pensé que cette idée de désaliénation totale ne soit pas possible chez Proudhon, parce qu'elle aboutirait à l'absolutisme. L'erreur des partisans de l'autogestion a été de croire que la « révolution sociale » soit spontanée ou fatale, tandis que Proudhon lui-même a souvent affirmé que la « spontanéité » est un des attributs de Dieu, qui s'opposent ceux de l'homme. Proudhon a dit: « Dieu et l'homme, s'étant [...] distribué les facultés antagonistes de l'être [...]: à l'un la spontanéité, [...]; à l'autre la prévoyance, la déduction, [...] » (SCE I393-394).

Or, lorsque Gurvitch parle du « pragmatisme réaliste » ou relativiste en tant que l'aspect positif de proudhonisme, il comprend que ce pragmatisme est libre de toutes les synthèses hegelienues.⁹ En fait, il

cite beaucoup des phrases dans lesquelles Proudhon a condamné Hegel¹⁰. Bref, « la synthèse de Hegel est *gouvernemental* » puisqu'elle est « antérieure et supérieure aux termes qu'elle unit »¹¹. C'est dans ce contexte qu'apparaît la notion de l'« équilibre » qui s'oppose à la « synthèse ». Dans *La Justice dans la Révolution et dans l'Église* en 1858, le philosophe de Besançon a écrit: « Les deux termes dont l'antinomie se compose, se balancent soit entre eux, soit avec d'autres termes antinomiques » (JRE IV148) et dans *Théorie de la Propriété*, qui est paru après sa mort, il a écrit: « Les termes antinomiques [...]. Le problème consiste à trouver non leur fusion, [...] mais leur équilibre sans cesse instable, variable selon le développement de la société » (TP52)¹².

Cependant, l'« équilibre » de même que la dialectique du travail pourrait devenir « tragique » lorsqu'il est « imposée d'en haut ». Si on critique radicalement l'absolutisme, il faut rejeter non seulement des synthèses, mais aussi des équilibres plus ou moins stables qui mettent fin à des luttes antinomiques au moins temporairement. Il nous semble que Gurvitch s'est trouvé en cette position. C'est pourquoi il utilisait le mot « équilibre » plutôt négatif et en considérait comme un résidu du rationalisme proudhonien qu'on reconnaît dans ses premiers ouvrages. Par conséquent, il écrit d'abord en le divisant en trois personnages: « en tant que doctrinaire socio-politique, Proudhon continue à rechercher les « équilibres des contraires qui se balancent sans faire disparaître la contradiction » »¹³, ensuite en affirmant sa limite: « les antinomies se complètent et s'équilibrent chez lui parfois trop facilement »¹⁴.

Parce que le sociologue relativiste considérerait la société comme Prométhée s'organisant lui-même par le travail, des équilibres stables sont tenus pour imposition de l'extérieur et d'en haut. En un mot, pour lui la notion d'« équilibre » est le premier pas vers l'absolutisme.

Tout au contraire, Édouard Jourdain, qui a écrit un ouvrage central de la « troisième renaissance » intitulé: *Proudhon, Dieu et la guerre* en 2006, affirme tout justement que la notion « équilibre » joue un rôle essentiel vers l'immanentisme dans la dernière pensée de Proudhon, en soulignant l'importance de la notion du « combat » qui apparaît dans *La Guerre et la Paix* en 1861. Cela va sans dire que le concept de l'immanentisme s'oppose à toutes les impositions d'en haut.

Citant des phrases célèbres impliquant « agir, c'est combattre » (GP53), Jourdain montre que la « paix positive » chez Proudhon est une « paix agonistique » et qu'elle suppose la « pluralité et l'autonomie des lutteurs »¹⁵. La véritable paix n'est pas une absence de la guerre. Il approfondit la théorie du droit de la force et invente un concept qui s'appelle le « polémos proudhonien » signifiant « fusion de la guerre et la paix » et « expression réelle du droit de la force »¹⁶, dont le clef est notion de l'« équilibre ». Sur ce dernier point, Jourdain résume: « Le combat, ou le polémos proudhonien, transforme la guerre et la paix en réhabilitant le droit de la force et en équilibrant les puissances »¹⁷.

Proudhon a utilisé en premier les mots plutôt négatif de « droit de la force » dans *Qu'est-ce que la propriété?* en 1840. Il s'agit d'un contexte où il explique la manifestation de la justice. Il écrit: « La justice, au sortir de la

communauté négative, appelée par les anciens poètes *âge d'or*, a commencé par être le droit de la force » (QP332). C'est de ce droit que la propriété est dérivée (QP333). Il va de soi qu'elle est condamnée radicalement dans les premières pensées de Proudhon. Cependant, il nous semble important qu'en observant des faits historiques, il a déjà employé cette notion.

Mais revenons à *La Guerre et la Paix*. Comme Jourdain justement montre, Proudhon a mis ce droit à la « souche d'où partent tous les autres ». Le « premier embranchement est le droit de la guerre, à la suite [...] le droit des gens ou international, le droit politique, le droit civil, etc. » en niant clairement le droit naturel (GP136). De plus, sans lui, il n'y aurait pas la justice, puisque la justice en principe n'a pour origine que le combat. « La justice n'est autre que l'équilibre des forces »¹⁸.

Nous en verrons plus tard les détails. Mais ici constatons que Jourdain considère la théorie du droit de la force comme étant un élément de compréhension de l'ensemble de la philosophie de Proudhon. Jourdain identifie l'« équilibre des puissances » dans *La Guerre et la Paix*, ainsi que la notion d'« équilibre » dans *Contradictions économiques* en 1846¹⁹. Nous lui consentons sur les interprétations de *La Guerre*, mais pas sur ce dernier point. Cependant, nous devons d'abord comprendre l'immanentisme proudhonien et préciser la différence entre Gurvitch et Jourdain.

2. Immanentisme de Proudhon.

Le grand mérite de l'argument de Jourdain, c'est qu'il précise les logiques de l'immanentisme de Proudhon, qui étaient bien connues mais loin d'être élucidées. Nous allons

montrer trois points de vue desquelles Jourdain donne raison à l'immanentisme de notre auteur.

Pour commencer, la notion d'« abus », qui a été déjà importante dans les critiques sur la propriété chez Proudhon, est mise en question. Jourdain insiste: « Le droit de la force consiste [...] à lutter contre l'abus de la force ». Le droit de la force n'est jamais le droit purement arbitraire. La force peut détenir le droit à moins de grandir indéfiniment comme faisait le souverain. Selon lui, c'est parce que notre auteur a sévèrement condamné Hobbes et Hegel. « C'est nier en l'homme la faculté [...] de juger ce qui est bien et ce qui est mal » par lui-même²⁰.

En deuxième lieu, Jourdain discute très originalement sur l'importance de la notion de la séparation ou distinction chez Proudhon. Il constate d'abord que « le combat est tout à la fois une séparation et une composition par libre association ». Ensuite, en citant des phrases de Michel Foucault et notant l'affinité avec notre auteur, il écrit: « Prétendre incarner une position médiane et neutre, c'est se poser inévitablement en autorité externe et transcendante »²¹.

Enfin, il parle de l'imposition de la paix, qui nous semble radical parce que ce point de vue aboutira à critiquer foncièrement le Contrat social²². Jourdain discute correctement sur « toute autorité transcendante », mais cette discussion s'en applique particulièrement, puisque Jourdain lui-même a déclaré qu'il détruit le combat « sous prétexte de sécurité »²³. En tout cas, cette phrase est notable: « [Toute autorité] impose une paix qui rejette le combat et nie le sens moral inhérent aux forces »²⁴.

Ainsi constatant les logiques de l'immanentisme, Jourdain y ajoute quelques

conditions qui le rendent possible. Nous nous limiterons deux conditions qui nous serviront.

D'abord, nous notons le principe de l'« élimination de l'absolue » que Jourdain prétend « fondamental dans la philosophie proudhonienne »²⁵. Comme nous avons vu, toutes les logiques de l'immanentisme impliquent les contraires de l'autorité externe et transcendante. Il faut donc éliminer l'absolu pour accomplir l'immanentisme. Jourdain cite :

« la raison collective se réduit, comme l'algèbre, par l'élimination de l'absolu à un système de résolutions et d'équations, ce qui revient à dire qu'il n'y a véritablement pas, pour la société, de système. Ce n'est pas tant un système, en effet, dans le sens qu'on attache ordinairement à ce mot, [...]; où la seule loi est que tout se soumette à la Justice, c'est à dire à l'équilibre. » (JREIII265)

Comme a dit Gurvitch, Jourdain ici considère ces phrases comme étant contre le totalitarisme²⁶. La différence entre eux est déjà précise. Ayant montré les logiques de l'immanentisme, Jourdain pense que la notion d'« équilibre » joue un rôle qui s'oppose à l'absolutisme.

En outre, puisque l'absolue doit être éliminé, tout le fatalisme doit aussi être rejeté, car celui-ci est l'absolutisation de la fin de l'histoire. Indiquant la discussion célèbre de Francis Fukuyama, Jourdain affirme que la fin de l'histoire est une fiction²⁷, et puis, qu'il n'existe aucun fatalisme historique ou économique²⁸.

Ces arguments semblent convaincants, puisqu'ils situent correctement la notion d' «

équilibre » dans l'immanetisme au lieu du relativisme. De plus, en rejetant le fatalisme, il peut dépasser la « deuxième renaissance », puisque les éloges de la spontanéité sont une sorte de fatalisme dont la fin est l'anarchisme tout spontané.

Néanmoins, nous ne lui accordons pas entièrement, parce qu'il met l'accent excessivement sur la « volonté ». Par exemple, il emploie les mots « une volonté de Justice » comme « volonté de liberté individuelle et collective »²⁹. C'est naturel parce qu'il accorde de l'importance de *La Guerre* qui discute sur le politique et qu'il a envie d'éliminer le fatalisme. En admettant que « volonté de Justice » ne signifie pas de volonté synthétique, elle permet de douter de l'origine de cette volonté à partir des combats. Encore, cela va sans dire qu'elle a été condamnée dans les premiers ouvrages, surtout dans *Qu'est-ce que la propriété?* en référant au souverain arbitraire. La critique violente à la volonté générale de Rousseau est un élément indispensable à notre auteur.

On en conclut que l'attention à la dialectique du travail de Gurvitch est digne de reconsidérer. Bien entendu l'intérêt principal a été le fondement de l'autogestion, mais il est évident que Proudhon lie l'ordre social avec le travail bien plus qu'avec la volonté. Encore, il y a une grande question au sujet de la relation entre l'immanent et l'absolue d'autant plus que Jourdain souligne le combat. Cependant, nous allons voir la position exceptionnelle du travail d'abord.

3. Travail, plus que la «force collective».

Nous venons de voir que Jourdain a

citée les phrases dans la septième étude de *La Justice* et qu'il a souligné l'importance de la logique de l'élimination. En fait, il a aussi cité des phrases qui paraissent dans la même page à propos de la différence entre l'être vivant et l'être moral:

« En tant qu'organisme, la société, l'être moral par excellence, diffère essentiellement des êtres vivants, en qui la subordination des organes est la même de l'existence. C'est pourquoi la société répugne à toute idée de hiérarchie, ainsi que la fait entendre la formule: Tous les hommes sont égaux en dignité par la nature et doivent devenir équivalents de conditions par le travail et la Justice. » (JRE III265)

Ici, incontestablement Proudhon affirme que le principe de la société est tout autre que celui de l'organisme dont la raison est « la subordination des organes ». Il est évident que des organes se subordonnent non pas volontairement, mais spontanément. Quant à la société, il est clair qu'elle ne s'organise pas spontanément, mais il n'est pas tout à fait exact de dire qu'elle s'organise par la volonté des hommes (en ce point, nous verrons cela plus tard dans le paragraphe 4).

Or, il est important que Proudhon considère non seulement la Justice, mais aussi le travail est la condition pour rendre les hommes égaux. Avant ces phrases, il a montré la « puissance effective qui est propre au groupe, et qui excède la somme des forces individuelles qui le compose ». Cette idée a été présentée en premier dans *Qu'est-ce que la propriété?*, comme la notion de la « force collective »

(QP215-217). C'est après cela qu'il donne « une équation générale qui fait du système social », c'est-à-dire une « balance », comme « la loi de la seconde » (JRE III265).

Cela va sans dire que la « force collective » est avant tout ce qui provient des travailleurs collectifs³⁰. En outre, les phrases que nous avons vues à la tête de ce paragraphe sont le contenu de la deuxième loi. Il faut ici remarquer, comme nous l'avons dit précédemment, que « le travail et la Justice » sont nécessaires pour avoir des hommes égaux.

Il y aurait deux interprétations possibles. D'un côté, on peut considérer que le travail est simplement une fonction distincte qui supporte la Justice avec des autres fonctions. Peut-être, cette interprétation est-elle celle de Jourdain lorsqu'il parle des fonctions. D'un autre côté, on le considère comme un principe indépendant de la Justice. Même si on prend cette position-ci, le travail se concerne à la Justice autrement.

Or, en constatant que « l'orientation pragmatiste de la philosophie sociale de Proudhon est le plus clairement précisée » dans la sixième étude de ce chef-d'œuvre (nous venons de voir les phrases dans la septième étude), Gurvitch a remarqué qu'on pouvait y reconnaître l'importance du travail. Selon lui, le travail se trouve « bien plus que la force collective », puisqu'il est, à simplement dire, « à la fois collectif et individuelle »³¹. Cette phrase mérite d'être notée, puisqu'on considère ordinairement que le travail est égal à la force collective. En outre, Gurvitch pense qu'il n'est pas seulement une fonction qui s'agglomère et fait une totalité de la collection, mais une sorte de force qui peut transformer l'ordre social.

D'abord, en citant cette étude, Gurvitch a justement écrit: « Grâce au travail, « la fatalité de la nature est domptée par la liberté de l'homme »(JRE III17) ». La liberté de l'homme est avant tout la liberté à travailler non pas à choisir par le libre arbitre. Ensuite, il accorde de l'importance sur cette phrase: « Cela signifie que toute connaissance dite *a priori*, y compris la métaphysique, est sortie du travail, et doit servir d'instrument au travail » (JRE III69)³².

On pourrait ici se rappeler que Proudhon en 1843 a défini le travail comme la « force plastique de la société » lorsqu'il est considéré historiquement (CO421). Ici, on doit remarquer que cette plasticité se trouve existant, non pas dans la logique mais dans l'histoire. Au même paragraphe, trois autres définitions du travail apparaissent en vue de la logique. Daniel Colson, qui est un auteur contemporain, donc a tort de parler de la « force plastique » comparée simplement à la « création elle-même » (JRE III89)³³. Si on veut la lier à la création, nous disons qu'elle est la continuation de la création dans l'histoire, car il écrit dans *La philosophie de la misère* en 1846 : « Le travail de l'homme continue l'œuvre de Dieu » (SCE I66)³⁴. C'est dans la même ouvrage que le travail se trouve clairement défini comme une force à transformer :

[...]l'équation générale, la nécessité suprême, le fait triomphateur, qui doit établir le règne du travail à jamais.[...]

Il faut [...] qu'une FORCE MAJEURE intervérte les formules actuelles de la société; que ce soit le TRAVAIL de peuple, non sa bravoure ni ses suffrages, qui par une combinaison savante, légale, immortelle,

inéluçtable, soumette au peuple le capital et lui livre le pouvoir. » (SCE I348)

Bien entendu le contenu est notable, mais également ce qui se situe juste avant le chapitre célèbre qui s'agit l'opposition de l'homme à Dieu. On se rappelle ici la seconde question sur l'argument de Jourdain c'est-à-dire la question sur la relation entre l'immanent et l'absolu. Il nous semble tout à fait exact lorsqu'il approfondit la logique de l'élimination de l'absolu dans *La Justice*³⁵, mais il voit rarement ce rôle essentiel du travail, qui est surtout souligné dans *Contradictions*.

Or, tel est le travail que nous avons solennellement inauguré, lorsque, partant à la fois de la réalité humaine et de l'hypothèse divine, nous avons commencé de dérouler l'histoire de la société dans ses établissements économiques et dans ses pensées spéculatives. (SCE I396)

Dans ce contexte, l'aphorisme bien connu de *Contradictions* apparaît: Dieu est l'ennemi de l'humanité (SCE I397). Il y a un combat radical qui ne sera jamais réconcilié ou équilibré. Jamais équilibré, car le principe de l'équilibre s'applique seulement à l'homme: « notre idéal n'est [...] pas infini, c'est un équilibre » (SCE I391). Ainsi il y a l'« antinomie fondamentale » entre l'homme et Dieu (SCE I394). Proudhon dit clairement: « cette réconciliation [...] ne se peut accomplir que par ma destruction » (SCE I397). Lorsqu'il écrit: « chacun de nos progrès est une victoire dans laquelle nous écartons la Divinité » (SCE I382), ces progrès ont cru être accomplies par le travail

non pas par l'antagonisme.

4. Direction de la «Révolution perpétuelle».

Hannah Arendt a considéré Proudhon comme le créateur de l'idée « révolution en permanence » et l'a critiqué parce que cette idée supprimerait le politique en prônant le social³⁶. Selon elle, il faut pouvoir commencer avec une base saine, comme la Révolution américaine, pour qu'il y ait le politique. Ici, Arendt a taxé Proudhon de fataliste.

Certes, un peu après de la Révolution de 1848, Proudhon a déclaré la nécessité de la révolution économique. C'est dans un article intitulé: *Toast à la Révolution* qu'il déclare la seule Révolution permanente. Il écrit: « Les révolutions sont les manifestations successives de la JUSTICE dans l'humanité » (M I143). Comme l'a reconnu Jourdain³⁷, dans cet article le christianisme est aussi un étage de la révolution bien qu'il admette l'absolu (M I143-144). On ne pourrait pas le considérer comme la logique de l'« élimination de l'absolu ». La Révolution permanente implique tous les étages y compris l'absolutisme.

On ne doit pas affirmer tout de suite que cette tendance est en effet un fatalisme. La même année, il affirme qu'« il suffit d'avertir de ce qu'ils ont à faire pour que la réforme s'opère, par leurs soins, librement » (SPS151). Il est cependant évident qu'il a envie de démontrer la nécessité de la révolution, par exemple lorsqu'il écrit:

Le travail [...] s'organise: c'est-à-dire qu'il est en train de s'organiser depuis le commencement du monde, et qu'il

s'organisera jusqu'à la fin. (SCE I75)

En fait, c'est dans *Idée générale de la Révolution au XIXe Siècle* en 1851 que l'embryon du concept d'équilibre de deux termes foncièrement antinomiques est apparu comme la Révolution et la réaction (IG99). Dans cet ouvrage, il souligne la « justice commutative » qui est réciproque (IG186) et la dominance du contrat mutuelle sur la loi (IG188-189).

5. Conclusion: Deux proudhonisme différentes?

Nous avons vu qu'il y a deux inclinaisons différentes chez Proudhon. Cependant, on peut chercher la cohérence qui serait définie comme l'anti-Contrat social. Dans ses premières pensées, il s'oppose à la « souveraineté de la volonté » rousseauiste. Il souligne le « fait » social et la « souveraineté de la raison » (QP339). Celle-ci est précisément appelée le « rationalisme » par Gurvitch, qui a tendance à parler de la nécessité. Après, ayant tendance à souligner le relativisme depuis 1851, il s'oppose à l'imposition d'en haut même si c'est celle de la paix comme Hobbes.

Or, dans la « deuxième renaissance », il y a eu un position qui considérerait proudhonisme comme insistant sur la nécessité de désaliénation ou absorption verticale à l'anarchisme. Dans la « troisième renaissance », on ne voit cependant pas cette tendance. Assurément, il a tendance à constituer un parti modéré dans ses dernières pensées. Proudhon passe à la position qui admet la force collective de l'État (JRE II258)³⁸, et même il nie la réalisation de l'anarchie (PF287). Ce concept est fondé sur l'immanentisme qui permet

seulement la relation horizontale. Mais, il reste de penser le pouvoir qui naît même dans l'ordre non hiérarchique comme l'indique récemment Robert Damien en discutant sur l'« équipe »³⁹.

Cependant, nous nous en tenons aux confirmations que le proudhonisme a assurément varié, mais qu'il a détenu la cohérence de la critique au Contrat Social.

Notes

¹ Nous donnons la référence des œuvres de Proudhon de l'édition Marcel Rivière sauf autrement indiqué, avec les abréviations suivantes; **QP**: *Qu'est-ce que la propriété?*, 1840; **CO**: *De la création de l'ordre dans l'humanité*, 1843; **SCE**: *Système des contradictions économiques ou Philosophie de la misère*, 2vols., 1846; **SPS**: *Solution du problème social*, 1848 (éd: Tops/Trinquier); **M**: *Mélanges de journaux 1848-1852*, 3vols.(éd: Lacroix); **IG**: *Idee générale de la Révolution au XIXe Siècle*, 1851; **JRE**: *De la justice dans la Révolution et dans l'Église*, 4vols., 1858; **GP**: *La guerre et la Paix*, 1861; **PF**: *Du principe fédératif et de la nécessité de reconstituer le parti de la révolution*, 1863. **TP**: *Théorie de la propriété*, 1865.(éd: Lacroix).

² On peut dire que la « première renaissance » a commencé comme un mouvement alternatif au bolchevisme avant la Première Guerre Mondiale. Cf. Minoru Tanigawa, *Histoire du mouvement sociale en France* (en japonais), Tokyo, 1983, Édition Yamakawa, p.139.

³ Gurvitch, G., *Proudhon, Sa vie, son œuvre avec un exposé de sa philosophie*, Paris, PUF, 1965, p.10.

⁴ Le premier usage de ce mot remonte à 1960. Daniel Guérin est partisan de l'autogestion. Cf. Guérin, D., *Proudhon oui et non*, Paris, Gallimard, 1978, pp.163-193. (chapitre intitulé « Proudhon Père de l'autogestion », qui a été d'abord présenté dans un colloque à Bruxelles en 1965 comme « Proudhon et l'autogestion ouvrière ».)

⁵ Gurvitch, *op.cit.*, pp.19-20.

⁶ Gurvitch, *op.cit.*, p.19.

⁷ Ansart, P., *Sociologie de Proudhon*, Paris, PUF, 1967, p.127.

⁸ Ansart, *op.cit.*, p.129. De plus il parle de «

l'usage du même concept d'aliénation » de Proudhon et Marx. Cette interprétation a été importée au Japon et bien connue, mais elle n'est pas exacte. Proudhon critique toujours l'athéisme humanitaire de Feuerbach dans son ouvrage. Cf. deLubac, H., *Proudhon et le christianisme*, Paris, Cerf, 1945 (2006), p.184; Haubtmann, P., *Proudhon 1849-1855*, Desclée de Brouwer, Paris, 1988, p.190; Jourdain, É., *Proudhon, Dieu et la guerre*, Paris, L'Harmattan, 2006, p.60 n.126.

⁹ Gurvitch, *op.cit.*, p.16.

¹⁰ Gurvitch, *op.cit.*, pp.17-21.

¹¹ Gurvitch, *op.cit.*, p.21. Ces phrases sont originellement apparues dans *La Pornocratie*, œuvres posthumes de Proudhon.

¹² Les deux sont cités par Gurvitch, *op.cit.*, aux pages 20-21.

¹³ Gurvitch, *op.cit.*, p.16.

¹⁴ Gurvitch, *op.cit.*, p.22.

¹⁵ Jourdain, *op.cit.*, p.51.

¹⁶ Jourdain, *op.cit.*, p.47.

¹⁷ Jourdain, *op.cit.*, p.54.

¹⁸ Jourdain, *op.cit.*, p.53.

¹⁹ Jourdain, *op.cit.*, p.47. Il écrit: l'équilibre des puissances (déjà théorisé dans ses *Contradictions* [...]).

²⁰ Jourdain, *op.cit.*, p.43.

²¹ Jourdain, *op.cit.*, p.53.

²² Proudhon a déjà critiqué Rousseau dans sa premier ouvrage intitulé: *De la célébration du dimanche* en 1839.

²³ Jourdain, *op.cit.*, p.22.

²⁴ Jourdain, *op.cit.*, p.56.

²⁵ Jourdain, *op.cit.*, p.68 n.144.

²⁶ Jourdain, *op.cit.*, p.68.

²⁷ Jourdain, *op.cit.*, p.53.

²⁸ Jourdain, *op.cit.*, p.58.

²⁹ Jourdain, *op.cit.*, p.31.

³⁰ Plus tard nous traiterons plus tard brièvement du développement de la théorie de la force collective dans le dernier paragraphe.

³¹ Gurvitch, *op.cit.*, p.27.

³² *Ibid.*

³³ Colson, D., *Petit lexique philosophique de l'anarchisme*, Paris, LGF, 2001, p.121.

³⁴ Louis Althusser a affirmé que la philosophie de Feuerbach est le « renversement de Hegel », mais elle n'y ajoute rien et plutôt lui retranche « quelque chose ». C'est l'histoire ou le travail. (*Écrits philosophiques et politiques*, tome II, Stock/ IMEC, 1995, p.173.) Notre auteur accorde de l'importance à l'histoire en critiquant

à la fois Hegel et Feuerbach (cf. n.8 plus haut).

³⁵ Jourdain, *op.cit.*, pp.115-117.

³⁶ Arendt, H., *On Revolution*, New York, Penguin Books, 1963 (2006), p.41.

³⁷ Jourdain, *op.cit.*, p.61.

³⁸ Cf. Gurvitch, G., *Dialectique et Sociologie*, Paris, Flammarion, 1962, p.134.

³⁹ Damien, R., *Éloge de l'autorité*, Paris, Armand Colin, 2013, pp.317-337

※ Cette étude a été encouragée par JSPS KAKENHI Numéro de la subvention 25870968.

(本研究は、JSPS 科研費 25870968 の助成を受けたものです。)